AWATSU

直江和葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＡＷＡＴＳＵ

【Ｎコード】
Ｎ５９３３Ａ

【作者名】
直江和葉

【あらすじ】
６８６年１０月２日大津皇子は謀反の疑いをかけられ、自害させられた。その前日、大津皇子の皇子・粟津王は吉備の船乗りの手によって救い出されていた。１０年後、粟津王・カイは養父・リキとともに帆船に乗り半島を行き来していた。旅の途中、児島の津で恐ろしい妖物に遭遇する。

ＡＷＡＴＳＵ－１－（前書き）

飛鳥時代、大津皇子の皇子・粟津王の冒険奇譚です。
古代の瀬戸内海をお楽しみいただけたら幸いです。

AWATSU－1－

※※※序

６８６年１０月２日。天武天皇の皇子・大津皇子が謀反ありとして捕らえられ、訳語田（おさだ）の自邸で自害させられた。

ももづたふ　磐余の池に鳴く鴨を
今日のみ見てや　雲隠りなむ

歌を残して、その人は葛城の二上山に眠る。

※※※壱

難波津から一隻の帆船が西へ向かって海面を滑るように走っていた。
おだやかな波の上、遠くうっすらと陸地が右手に見える。前方は淡路島。

甲板に、長身の青年が真っ直ぐ前を向いて立っていた。潮焼けした肌は赤銅色で、鍛え上げられた身体は着物をつけていても力強さを伝えてくる。
よく見ると、倭人ではない。しかも若い。二十歳もいってはいないだろう。半島の血を色濃く残すその相貌は、しかし、女の目を引くに充分な魅力を持っていた。
彼の名をリキといった。何代か前から倭に移住し、今は吉備国大伯に一族がいる。
彼の一族は秦氏に仕える家であった。吉備海部直氏と深い関わりを持ち、本国・新羅に船で往来していた。

海部の一族である吉備海部直（きびのうみべあたいし）氏は、吉備一族と一定の相対関係にあった。
大和との抗争により吉備一族は衰退し始める。海部直氏は大和王権との結合関係を深めはじめた。大和側に何の否やがあったろうか。壬申の乱以後、大和はじわじわと吉備国を手中にしようと、その侵略の手を伸ばしてきていたのだ。
その大きな理由は、吉備国が海上交通により半島から渡来する人々、文化、技術を多分に吸収していたためである。
神功皇后の半島遠征以来、海部は大きな力を発揮していた。その力を制することによって、大和はより強固な国づくりができる。そういう背景があった。

青年の腕の中に、すやすやと眠る嬰児があった。彼が生涯かけて護ることになるだろう子供は、名を粟津王（あわつおおきみ）という。
政権争いの犠牲者である大津皇子の忘れ形見であった。
――ゆえに。リキはこの嬰児の正体を誰にも明かさず船に乗せた。
この子がやがて成長し、物事の分別がつくようになった頃、亡き父

母の非業の死を告げねばならぬかと思うと、青年の心は何とも暗い気分になってしまうのであった。
そもそも、何故彼がこの嬰児をその手に委ねられることになったのか……。

※

６８１年、天武天皇は鵜野皇女の期待に添って草壁皇子を皇太子にたてたが、二年後に大津皇子を皇太子に準ずる地位につけた。しかし、天武帝が病に伏せると鵜野皇后と皇太子は政権を掌握する。大津皇子は朝政からはずされた。――その争いの影には、藤原不比等がいた。

大津皇子は後日、姉である伊勢の斎王・大伯皇女を訪ねた。弟を大和へ帰した後、斎王は内々に大津皇子の皇子・粟津王を都から脱出させるよう手配した。それが、大伯の郷から船を出したリキの手にゆだねられたのである。
斎王は自らが生まれた大伯海に生きる人々に、弟の子の未来を託したのである。
リキが、大津皇子と妃の山辺皇女に会ったのは、ちょうど皇子が捕らえられる前日であった。
大津皇子はリキを密かに屋敷へ忍ばせ、ただ一言、
「頼んだぞ、リキ」
そう言った。
父の腕からリキの腕に、嬰児は移された。三つになるかならぬか。幼子を手離さねばならぬ皇子と妃の心中はいかほどであったか……。
山辺皇女は気丈に、我が子に言い聞かせるように言った。
「粟津、しっかりと生きるのですよ」
予感があったのかどうか――。粟津王は、小さな頭をこくりと振った。

「はい。ちちうえ。ははうえ。あわつは大きくなったら、ちちうえとははうえに会いにまいります」
大津皇子が莞爾と笑った。――その、最後の笑顔を、リキは一生忘れることはないだろう。
文芸に秀で、豪快で、活発で、誰からも愛された皇子であった。リキでさえも、惹かれられずにはおられなかったほどの男であった。だからこそリキは誓ったのだ。
「この命に代えましても、お護りいたします。海の神に誓って」
リキなりの、精一杯の誠意の証であった。
大津皇子は頷き、青年の手に笛を渡した。
「この子のもとに」
「しかと。お預かりいたします」
リキは闇にまぎれ、都を離れた。

※

リキの腕の中で粟津王が目覚めた。
温かな腕と掛け布にくるまれた粟津王は、澄んだ目をリキに向け、にっこりと笑った。
「お目覚めか、皇子。――貴方を海の上ではカイと呼ぼう。うん、父上によく似ておいでだ。おそらく気性も……」
嬰児は小首を傾げ、
「かい」
と呟いた。
「そうです。カイです」
リキはゆっくりと頷き返した。

船は吉備国・牛窓の津へ着いた。
彼にとっては一族の祖国よりも、この瀬戸の海とこの地が故郷であ

った。
荷を下ろす水夫たちに混じって、船と陸に掛けられた細い梯子を、粟津王を抱いたまま軽い足取りでヒョイヒョイと渡っていく。
「よぉ、リキ！　バカに長い間帰らねえと思ったら、大和で子供つくったのかよ！　村の女が泣き狂うぞ～」
「ばかいえ」
顔見知りの水夫が軽口をたたくのに、青年は笑って言い返した。
半島から来た船や、大和へ向かう船が港を行き来している。津は市のようにごった返し、あちこちで怒鳴りあう声や、陽気な笑い声が響いていた。

この時代、吉備では製塩がおこっており、朝廷への調（税）として貢納されていた。
他にも、水母や鰯、鯛、海細螺などの海産物が数多く大和へ運ばれている。
後世、鮮度を保つため、活けすをそのまま大和へ運ぶようになるのだが、この時代はまだせいぜい加工を施す程度であった。
また、タコツボ漁もすでにされており、ほとんどは小さなタコ、イイダコ漁が盛んに行われていた。ある所では、潜水漁撈も行っていた。

「あれはどこへいくの？」
粟津王が小さな手を帆船に指した。
潮風が二人の髪をなぶって駆け抜ける。
「あれは、大陸へ行くのです、カイ」
「ふうん」
大陸の意味もわからぬままであろうに、しかし、嬰児の目は大きな船に釘付けになっていたのだ。
「大きくなったら、カイも乗せてあげましょう」
「うん！　そして、ちちうえとははうえに会いにゆくの」

無垢な言葉に、リキはちくりとした心痛を覚えた。哀しげな微笑になる。
もう、この子の父母はこの世にはいないのだから…。
牛窓の津から、大伯郷（おおくのさと）までは少しく距離があるため、青年は馬でもどることにした。
大型の対州馬に皇子を乗せ、青年もそれにまたがる。
「カイ、しっかりと私に掴って」
「うん」
小さな手が、青年の着物を握った。リキは掛け布を二枚重ねてもう一度包み込むように嬰児に掛け直し、左腕にしっかりと抱え込んだ。
「それっ」
かけ声とともに、馬は地を蹴った。

馬が倭国に来たのはかなり古い時代である。王の墳墓への殉死にも、馬具と一式埋葬されている。
東国の馬のほうが体が大きく、リキが乗馬しているのは対州馬にしては大きいほうであった。
津から離れてゆくと、麦の畑が広がっている。海にさかえ、灌漑用水を整備し、沼地の多いこの地方ではこれにより、米、麦などの栽培が著しく発達した。
大和の力が加わり始め――すでに大和に制せられているのだが――しかし、海の民は独自の技術を持つゆえ微妙な立場に立っている。水軍としての力は、それほどに大きかったのだ。

それから、１０年の月日は流れるように過ぎていった。

※※※弐

初夏。
桜の花も散り、若葉が目を出す頃。
「ああ～～っ、たいくつ、だっ！」
少年は、持っていた筆を硯の上に放り出すと、ゴロンとひっくり返った。
紙の上には千文字の習字が途中になっている。大きく伸びやかな字が白い紙の上を踊っていた。
この頃はまだ、大和朝廷でも六朝風の文字が使われており、後に欧陽詢風の書体が渡来してからは、そちらの文字で統一するため、習字の書体は厳しく検査されていたらしい。
しかし、吉備では欧陽詢風の書体が定着しはじめた頃でも、六朝風の文字と入り乱れて使われていたという。

床の上に転がった少年は、１３～４歳。くっきりとした目鼻立ちで、涼やかな目元の、美しい少年であった。
彼を粟津王と知っているのは、この屋敷の主人とその息子であるリキのみである。
少年は通り名をカイといった。少年のほうは長い名よりも、カイというすっきりした響きのほうが好みであったようだが。
少年が、リキとともに吉備に来てから十年の年月が過ぎた。その間に都では――特に朝廷では大きな動きがあった。
草壁皇子が病死、持統天皇から文武天皇へ移り、大宝律令が制定された。
その暗く非情な争いが今もなお続いているであろう都の外で、少年は人々の温かくおおらかな庇護のもと、すくすくと成長した。

カイは今、船乗りの修行中の身である。

――と。

「カイ」

やさしい低い声が少年を呼んだ。

「なあに、リキ？」

カイはリキにくっついて船に乗るのが好きだった。だから、今日もどこかへ連れて行ってくれるのかと少し期待したのであったが……。

「お客様ですよ」

「お客様…？　だれ？」

カイの問いに、リキの表情は心なしか曇った。彼は押し黙ったまま目を伏せていたが、やがて、顔をあげた。

「カイの伯母上様であらせられるお方です。昔、伊勢の斎王でいらっしゃった…」

「俺の伯母上？」

カイは呟き、そして、はじかれたように駆け出した。

「カイ！」

リキが呼ぶのも聞こえぬようであった。客の間へと走ってゆく少年の後姿を、リキは痛ましげに見送った。

（俺に伯母上がいた！）

走るカイの胸中は踊らんばかりに高鳴り、初めての肉親にまみえる嬉しさで宙を飛ぶようであった。

けれど…。

（伊勢の斎王…？）

なんだろう？なんだか嫌な予感もする。このまま何も知らないで、伯母上に会わないでいるほうがいいような気がする…。

少年の足が、一室の前で止まった。

このまま、どこかへ隠れていようか…

「カイか？」

几帳のむこうから老人の声。
「…はい」
「お入り」
穏やかなその言葉に手を引かれるように、カイは中へ入っていった。
さらりと几帳が開けられる。
「――っ！」
はっと息を飲む気配。
少年の目に映ったのは、もう若いとはいえないが美しい女だった。
そして、下座には一家の棟梁・リキの父である阿伽具（あかぐ）が座っていた。
「さ、ここへ」
大きな無骨な手が、少年を傍らへいざなった。
「その、お子が…」
女は震えがちに呟いた。
「はい。まこと、大伯皇女様の弟君、大津皇子様の皇子・粟津王様です」
「ええ…！　大津の幼い頃によく似て…」
大伯皇女の目に涙がゆれた。
衝撃を受けたのは、カイの方だ。大津皇子という天武天皇の皇子のことは聞いたことがある。確か、謀反の疑いがあるとかで捕らえられ、自害された皇子だ。
（大津皇子が、俺の父…！？）
では、あの遠い昔、記憶にあるたった一つのあの笑顔が父・大津皇子だったのか？　カイの中で、大津皇子とリキの顔が入り乱れた。
小さな自分の傍らにいつもいてくれた、逞しい青年のことを密かに父ではないかと思っていた。
誰かの腕に抱かれて、父が自分を見つめて笑ったあの笑顔が、いつしかリキの笑顔と重なってしまうくらいに遠く、ぼんやりとした記憶。
「カイ」

少年の混乱を制すように、阿伽具が呼んだ。
「…俺は謀反人の子供なのか…？」
「大津は…お前の父君は謀反など企ててはおりませぬ！」
少年の搾り出すような言葉を、パンと撥ね返すほどの強さで大伯皇女が叫んだ。
「――大津は、謀反など企ててはおりませぬ。あれは…むしろ、大津のほうが謀られたのです。無実の罪で……」
禁忌を囁くように、皇女は言った。そして、その後のことは口にするのをはばかった。
「…今更…今更そんなこと言われたって…。俺…俺はずっとここにいるからなっ！　おじじとリキのそばから離れないからなっ！」
カイは勢いよく立ち上がり、一気にぶちまけると涙でいっぱいになった目で二人を睨みつけ、外へ飛び出した。
「カイっ…」
「……」
室には阿伽具と、皇女が取り残された。皇女はうなだれ、小さく呟いた。
「…あの子が怒るのも無理はありませぬ…。今更会ったところでどうなりましょうか…私が軽率でした…」
「いいえ、皇女様…。カイに、もっと早く知らせておくべきだったのです。――非は私共の方にございます」
「阿伽具どの…」
「恐れ多くも皇子様をお預かりした身でありながら、我が子同然にお育て申し上げましたこと、申し訳なく思っております。…ただ、すくすくと成長なさる姿は、この爺にとって何よりの楽しみとなっております…」
老人は苦笑しつつ、その目に慈しみを浮かべて、大伯皇女に告げる。
「阿伽具どの…どうか、粟津をたのみまする…」
淡く微笑みながらの皇女の言葉に、阿伽具は深く頭を下げたのだった。

手の中には、物心ついた頃から肌身離さず持っている笛があった。
（貴方の、父上の形見です）
いつだったか、リキがそう教えてくれた。
（リキだって笛は上手なのに…）
その唐突なことばは、少年のリキに対する感情の底から出たものであったろう。リキが自分の父親ではないのかと――。
「でも…俺がリキの子供だとすると、リキはいつまでたっても女房ができないなあ…」
それはよくない。やはり、リキの身の回りの世話をしてくれる、いい女房は必要だ。うん。
当の本人が聞けば閉口しそうなことを少年は真面目に考えている。
笛を口元にあてた。
澄んだ音色が流れてくる。
笛を吹くのは好きだった。その透明な音はどこまでもどこまでも遠く飛んで行きそうで、少年の心を自由にしてくれる。
「……」
小高い丘の上に登ると海が見える。
小さく帆船が、波間をよぎっていく。遠く霞んで見えるのは淡路島だろうか。

大伯皇女は、何故今ごろ来たのだろう？
大和に連れていかれるのだろうか…？
自分はここにいてはいけないんだろうか…？
カイは吉備が好きだった。
朝焼けには黄金に、夕焼けには燃えるように赤く、夜はどこまでも黒く、月が照らせば深く青い…。この刻々と姿を変える海が大好きだった。
「カイ、ここにいたのですか」

リキの声が背後から聞こえた。愛馬の海王から降り、ゆっくりと近づいてくる。
「……俺、大和に行かなきゃだめなの…？」
ぼそりと呟く。
「何故です？」
「だって、伯母上は…何しに来たの？　俺を連れ戻しに来たんじゃないの？」
「違いますよ、カイ。…カイにきちんと話しておかなかった私も悪いのです。…ただ…、大津皇子様の身の上に起こる事件を予感されて、幼い貴方に朝廷の手が伸びるのを防いだのは、大伯皇女様なのですよ。今、貴方がここにいるのは、あの方のおかげなのです。それ程に案じておられたために、時の至るのを待ちつづけて貴方のお顔を見るのを楽しみにしてらしたのですから、誤解してはいけません」
「……」
いまだ憮然とした面持ちで聞いていたカイだったが、いきなりくるりと向きを変えた。
「――――」
リキはわざとらしく首を傾げてみせた。
「…謝ってくる」
唐突な物言いに吹き出しそうになるのをこらえながら、リキはにっこりと笑った。
「そうですね。…カイ。私も大津皇子様には一度しかお会いしておりませんが、貴方は本当によく似てらっしゃる。父上に瓜二つですよ。私にはわかります」
（私には――私にだからこそ――わかります）
カイの顔が、後ろ向きのままほころんだ。
自分はここにいてもいいんだ。リキと阿伽具と一緒に帆船に乗って海を渡りながら、ここで暮らしてゆけるのだ。
照れ臭くて何も喋れなかったけれど、少年は嬉しそうに駆けていっ

た。
「――」
くすりと笑った青年は、海王の鼻を軽く叩いて草の上に腰をおろした。

「おじじ！　伯母上はっ…」
屋敷に戻るなり、大きな声で叫んだ。
「おや、カイ。お客人ならさっきお帰りになったよ」
「えっ…」
「津のほうに――」
”津”の一言の部分で、すでに少年の姿は戸口にはなかった。
「やれやれ、元気のよい」
家人は苦笑し、また己の仕事に戻っていった。

風は海に向かって吹いている。
馬の脚には追いつけない。少年は津を見下ろせる丘に駆け上がり、見渡してみた。遠く、馬と車の一団がゆっくりと進んでいるのが見えた。
「伯母上……」
大伯皇女にとって、あの事件はいまだ心を痛めずにはおられぬことなのだ。
気丈なまでに、これまでの人生を生きてきたのは、あるいは、二四歳の若さでこの世を去らねばならなかった弟のためであったかもしれぬ。
大和の二上山眠る大津皇子とさほど遠くない場所に居を移して、苦しみながらも前を向いて、真っ直ぐに生きてゆくことが皇子に対する最大の手向けであったのかもしれない。

カイは、衣の懐から笛を出すと、口元にあてた。

ぴー　ぴいひょう
ひょうう　ひゅるる……
風は海に向かって吹いている。
「待って！」
車の中から、大伯皇女が声をかけた。
「待って…。笛の音が聞こえます…」
車の傍らに騎乗していた阿伽具が振り返り、丘の上の少年を見つけた。
「あそこです」
指差した先、衣を風になびかせて、笛を吹くカイを、大伯皇女はその目にしっかりと焼き付けるようにみつめた。
ぴーひょう　ぴーひゅるる
ひょう　ひょう……
「…粟津……」
大伯皇女の目から涙が流れ落ちた。

やがて、車が動き出す。
津へ着いたら難波へと向かう船に乗り、大和へ戻るのだろう。
父が眠る二上山がある大和へ。
カイは吹きつづけた。
大伯皇女が乗った船がみえなくなるまで――。

AWATSU－2－

※※※参

粟津王――カイ――の笛の評判を聞きつけた大伯国造が笛を所望したのは、それから十日ほどたった後だった。
阿伽具は背筋に冷たい汗が流れるのを感じたが、
「折角のお越しですが、あいにくカイは息子とともに航海に出ております。半島まで足をのばす予定でございます。無事、航海から戻りましたならば参上させますので、今日のところはお引取りくださいますよう」
老人の言葉に、国造の使者は眉をしかめた。
「うぬ。阿伽具、半島への航海はいかほどかかりそうなものか？」
「はて。順調にゆけば、ひと月かふた月。海と空の状態によっては、倍はかかりましょう」
「うーむ…まあ、おらぬものは仕方あるまい。国造様にはそのように申し上げておこう」
「申し訳ございませぬ」
頭を下げた阿伽具を残し、使者らは引き上げていった。
「――――」
海部の棟梁はふう、と一息ついた。
少年が戻るまでに、対処の法を考えなければならなくなり、多忙の身としては少々頭の痛いことになりそうであった。
しかし。
「ふふ…。どんなに隠しても、光は闇を透かして洩れるか…」
大津皇子はその豊かな才と、好まれる人柄故に政庁からはずされ、謀られた。また、カイも父譲りの才ゆえに目を止められてしまった。

しかし、阿伽具には断固とした思いがある。
あの輝くような少年を政争の犠牲には、断じてさせぬ。それは、息子・リキとて同じであろう。
容姿も年を経るごとに、大津皇子の面影を濃くしてゆくだろう。――それは、リキが苦笑まじりに言ったことだが――。それ故、中央に一歩足を踏み入れれば、小さからぬ動揺が起こるのは目に見えている。
阿伽具としては、このまま人知れずこの海の国で平和に、幸せに生きていってほしいのだ。
「やれやれ。私も忙しいことだ……」
老人は心なしか楽しげに呟いた。

そんな阿伽具の心配をよそに、カイは心地よい潮風を受けながら甲板をゴシゴシ磨いていた。
船は児嶋に向かっていた。
ここで一旦荷物を卸し、別の荷を積み込んで岡水門（おかのみなと）へ行き、そこで最終的な必要物資、また、品を仕入れたら真っ直ぐ新羅へ向かう予定であった。
天気もよく、波も穏やかでいい航海になりそうだった。
「錨をおろせ！」
「梯子をかけろ！」
「綱を投げろ！」
水夫たちの声が飛び交う。
「荷を下ろせ！」
リキが号令をかけた。
水夫たちは細い梯子を、荷物を担いで降りてゆく。あちらの梯子では、まるで流れるように水夫から水夫の手に、荷が渡り下りていった。
カイもそのへんの荷を一つ担ぐと、梯子を渡った。

一陣の風が横から駆けてゆくと、細い少年の体はぐらりとかしいだ。
「わっ…」
がしっと支えられて、見上げるとリキがにっこりと笑っていた。
「ありがとう」

リキはカイを促して、浜へ降り立った。逞しい体が汗でびっしょりになっている。カイはしみじみと、物心ついた頃から自分のそばにあって護ってくれている男を見つめた。
彼はこういう力仕事もすれば、驚くほどに勉強もしていて知識の広さ、深さに驚嘆させられる。
半島の言葉も自在に操り、風を読み、太陽と星と潮をみる力量は一流。武術も他者に引けをとらなかった。リキはそれでも、日々の訓練を怠ることはない。淡々と鍛え、淡々と勉強をしていた。
船に乗り、指導してゆく立場である彼は、ひとたび海の上に出ればカイとて容赦なく叱り付ける。
この瀬戸内海から出れば、半島、倭の海賊が積荷を狙って襲い掛かってくるのだ。船底に穴を開けられたり、船べりから青竜刀を担いでいきなり侵入してくることもある。
その、どんな状況に立たされようとも冷静沈着として対処せねばならぬのが船長の役割だ。
カイが叱られるのはカイを水夫として扱ってくれているからだ。そう、少年は思っている。
それにしても、いつ起こるかわからぬ災難を胸の前に突きつけられていても、男たちは海へ出ることをやめない。
体を鍛え、技を磨き、いつなんどきなりとも対処できるように、水夫たちは船上での規律を守った。足が乱れた時の恐ろしさを身をもって知っている。それこそが、水軍と言われるゆえんであった。
カイはこんな男たちの中にいる自分が誇らしく、また、自分もリキのように一流の船乗りになるのだと信じていた。
「カイ、饂飩でも食べに行きましょうか」

ふいに声をかけられ、ほえ？　という妙な声を出した少年は、リキの後方、船の方に目をやった。積荷を下ろす作業はすんでしまったらしい。
「あっ…ごめん！　俺ぼけっとしてて…」
先刻、水夫の一員という誇りに燃えていただけあって、積荷一つで終ってしまったという事実は少年をひどくみじめにさせた。
「大丈夫ですよ。ここを出るときは、ぼけっとしてられなくなりますからね」
にっこりと釘をさした男に、少年は顔を真っ赤にして言い返した。
「わかってるよ！　次は絶対みんなより働くから！」
「ははは…その調子その調子。でも、まあ、今日はとにかく餡飩を」
「……。なに、うどんって？」
「おや、知りませんでしたか？」
不思議そうな顔をした少年に、男は説明してやった。
「へええ！　どんな味がするのかな？　行こうよ！」

好奇心に瞳を輝かせた少年を連れて、リキは津のそばに栄える通りへと入っていった。
いろいろな店が並び、津に入った船員たちが賑やかに話しあい、笑ったりしてお祭りのような騒ぎである。
店、といっても、現在のようなものではない。取引をする有力者がリキたちのような船乗りにちょっとした労いのために設けてくれたものだった。他所ではこんなことはない。
リキが入ったのは、その中でも、特に賑やかな小屋であった。大きな鉄鍋がもうもうと湯気を立て、そのむこうで小柄な翁が手際よく餡飩を湯にくぐらせていた。
入ってきた長身の男を見るや、
「リキ！　リキじゃねえか！　久しぶりだのう！」
嬉しそうに叫んだ。男も機嫌よく笑って手をあげた。
「おやっさん、元気そうじゃねえか。足はもういいのかい？」

「おおとも。許都魚（サメ）にかすられたくれえで、ここをたたむわけにはいくめえ」
「まったくだ。おやっさんの饂飩は絶品だからな」
そう言いながら、カイに座るよう促す。翁ははじめて少年に気づいたようだった。
「リキよ、お前ぇ、子持ちだったかい…？」
はて、と呟いて交互に見比べる翁に男は苦笑した。
「馬鹿言うなよ。俺はまだかみさんなんていねえよ」
「そうかい？　おらあ、てっきりあのお媛さんと……」
翁はそこまで言って口をつぐんでしまった。男はほろ苦く笑っただけで何も言わなかった。少年は不思議そうに翁とリキにいったりきたり目を動かしたが、やはり、何も言わずにいた。
ぐるるるるる……
カイの盛大な抗議が腹から聞こえると、翁はにっこりと笑って大きな手を少年の頭にのせた。
「おお、おお。腹が減ってんのによ。じじいのボケめが！　すまねえなあ、ぼうず。今うまい饂飩を食わしてやろうなあ」
「う、うん…」
翁の背を見送って、なんとなく気まずくうつむいた少年の頭にリキの大きな手が置かれた。
「カイ、私のことは気になさらず」
そう言われて気にならないほうが不思議だと思った。

古くからある饂飩も、カイにとっては新鮮な食べ物であったようだ。少年はいたく気に入ったらしい。
リキはそのまま船に戻り、少年は少しぶらついてみることにした。漁師たちは今時分は海の上だ。今、陸の上にいるのは年寄りと女たちがほとんどだろう。ぶらぶらしているうちにずいぶん津から離れてしまった。
「いけね。戻んなきゃ」

くるりと反転した。
「じゃあ、お母さん、ちょっと行って来ます」
路地のほうから少女の声が聞こえ、カイはふとそちらへ目をむけた。
はた、と少年と少女の目が合った。
「あ…」
少女は恥ずかしそうにうつむき、ぱたぱたと駆けていった。
少年はぼんやりと、その後姿を見送っていた。

「カイ、どうしました？」
甲板の先でぼやっとしている少年を、リキが訝しそうに覗き込んだ。
「え？　ああ…ううん、べつに…」
心あらずの様子で呟いて、そのままぼんやりと波を見つめている少年を、男はしげしげと観察する。ふと、思い当たってこっそり言ってみた。
「カイ、女の子に会いましたか？」
横っ面をはたかれたように、ぎょっとした顔で振り返る。
「当たりですか」
リキはにっこり笑った。
　大伯郷でも女の子はいた。一緒に野山を駆け、海で遊びもした。
しかし、今日出会った少女に対する感情はカイが今までに知らないものであった。
その感情の名前を知っているのは、今のところリキだけであろう。
「どこで出会ったのです？」
「…あの通りを抜けたとこ…」
おずおずと話す少年のこんな頼りなげな声を聞いたのは初めてだった。何に対しても物怖じしない性格で、歯切れの良い喋り方をする子供であった。
男はしかし、嬉しくもあったのである。
「カイ。船はしばらくここに泊りますから、もう一度その娘に会っていらっしゃい」

「ええっ？　だって…」
「次に会えるかどうかなど、わかりはしないんですよ？」
その言葉の裏にある微妙な色を、今の少年には気づけるはずもなく、ただ、あいまいに頷いただけだった。
「さ。今日はもうお休みなさい」
リキに促され、少年は小さな子供のようにこくんと頷いて甲板を下りて行った。
　船と海の上に満天の星が輝いている。
リキはその長身を船べりにもたせかけて、吐息とともによりかかった。
津のかがり火のほかには灯りはない。遠く、沖のほうは闇に沈み、島の影も黒く溶け込んでしまっている。
時折、水面で魚が跳ねた。
（弥輪に会ったのは十五のときか…）
そう。今の少年と同じくらいの時だった。
彼の初恋は、苦さを伴ってまだ心の中に片鱗を残していた。

　翌日、カイは船を降り、昨日の饂飩屋のあった通りへ行った。
早くも店を開ける用意で、ちらほらと人が見える。ちょうど、ひょっこり饂飩屋の翁が顔を出した。
「おう、昨日の坊じゃねえか」
「お早う、じいちゃん」
人懐こい翁の笑顔につられて、少年も笑った。
「どうだ、ちと寄っていかんか？」
「あ、うん」
ちらりと昨日の少女のことが頭をかすめたが、翁の言葉に頷いた。
　白粥に獲れたての鰯を焼いたのを頬張りつつ、ふと翁の足を見た。
その、右足。
着物から覗くふくらはぎの肉がざっくりとえぐりとられている。
少年の視線に気づいて、翁は恥ずかしそうに言った。

「こりゃすまねえな。みっともないモノ見せちまって…」
「ううん。昨日言ってた許都魚に…？」
「ああ。潜ってたときにな…。骨まで喰われなくてよかったよ。漁は十分できるからなぁ…。まあ、不自由することもあるがな。許都魚の奴も、わしの足で少しくらいは腹の虫もおさまったろ」
翁は屈託なく笑う。この老人は、自分の足を食いちぎった許都魚に対して何の憎しみも抱いていないらしい。
「そりゃあ、おめぇ。わしらの腹の中には海から捕ってきた魚がめいっぱい入るじゃねえか。喰い喰われが掟ってもんだろうがよ」
少年は妙に納得して頷いたのである。
「そういやあ、坊はリキのなんだい？」
「なにって…」
カイは口をついて出そうになった言葉を一旦飲み込んだが、なんとなく、この翁には知っていてもらいたいような気がした。
「俺は、都からリキに助け出されたんだ」
「――？」
「俺の父は、今の帝のえーと…何になるんだっけ…？天武天皇の皇子で大津皇子っていうんだけど」
「みっ…帝…っ？」
翁が仰天して少年を見つめ、
「そっ…それじゃ坊は…いや、あなたさまは…」
「でも、じいちゃん。俺はもう政とは関係のないところで育ってきたし、都の記憶なんてぜんぜんないんだ。俺の父を知ってるのはリキと阿伽具と伯母上だけなんだ」
皆はしらないんだよ。
「俺はね、リキと一緒に海で生きる。あちこち船で渡っていろいろ違う国を見てみたいんだ」
莞爾と笑った少年の、その涼やかな相貌を見つめていた老人は、ふと笑って呟いた。
「…この世はいろんなお人がいるもんだ…。リキのような男に、未

だにかみさんがいねえってのもどうにも不思議だったが…。いや、まてよ…」
少年の耳がピクリと反応する。
「あいつ…ひょっとして、まだあのお媛さんのことを…」
「あのお媛さんって？」
「……。わしが喋ったことは内緒にしといてくれよ、坊。だから、これは、夢の中のことだ」
この老人もたいがい無茶を言うもんだと思ったが、カイは頷いた。
「――あれがまだ、そうさなあ…坊と同じくらいの時だったろうかな。すでにいっぱしの水夫として船に乗り込んでたよ…」

※

今から十五年ほど前のことになる。
半島から戻ってきた帆船が、伊都岐嶋（現在の厳島――宮島である）で一旦留まった。
阿伽具とリキ、それに水夫たちが弥仙参りに船を降りた。
多くの供物をたずさえ、阿伽具を先頭に登る。
この嶋はお山自体が人々の信仰の対象となっており、この近辺には霊力を持つものが多く生まれた。ここが海神をまつる島になるのは、ずっと後世のことである。
弥仙の麓にひっそりとたたずむ堂に手をあわせ、そばにある小さな庵に阿伽具が声をかけた。
庵の中から静かに現れたのは、まだ少女の巫女であった。
「これは阿伽具さま。ようこそおいでくださいました」
「弥輪殿も息災でなにより。これを……」
阿伽具の差し出した供物を、巫女はうやうやしく受け取り、祭壇に捧げ祭った。
「どうぞ、皆様に弥仙さまのご加護のあらんことを…」
一同はもう一度手を合わせ、そして山を下りて行った。最後尾につ

いていたリキが、ふと庵の方へ目を向けたとき。
「――――っ」
清冽に生きる少女のその姿は、少年の心を捉えるのにさほどの時間を要しなかった。
朝に夕にリキの心を悩ませ続け、最後の停泊の夜、見たさ会いたさに少年は船を抜け出した。庵への山道を鹿のように駆け上がってゆく。
夢中だった。
ただただ会いたくて走っていた。
「……」
肩を上下させて、弾む息を自分の耳で聞きながら、意識は庵のほうへ集中している。
少年は思い切って声をかけてみた。
「…はい…？」
庵に住む人は、呼びかけの声が少年のものだったので不思議に思い、戸を開けてくれたのだろう。静かに少女が現れた。
リキの胸は大きく高鳴り、夢にまで見た少女を目の前にして飛び上がらんばかりだった。
「あなたは…」
少女巫女は不思議そうにリキを見つめ、そして、”ああ”と呟いてにっこりと笑った。先日阿伽具たちの一行にいた少年だと気づいたようだった。
少女は、夜の珍客を怒るでもなく招き入れ、どうぞと座をすすめた。庵は驚くほど殺風景で、少年はどこに腰をおろせばいいものやら戸惑っている。
「まあ。ほほほ…。どこでもお好きなところへ。ここには何もございませんもの」
少女は汗をかいている少年に、水を差し出した。短く礼を言って、少年は一気に飲み干すと、なんの前置きもなく、いきなり叫んだのである。

「お、俺っ…会いたくて！」
「……？」
「俺…あなたに会いたくて…」
それっきり真っ赤になってうつむいてしまった少年を、唖然として見つめていた少女は、微笑んだ。
「…ありがとうございます…」
少女が応え得たのは、たったこれだけだった。神に仕える身として、彼女はすでにその身と魂を神へ捧げることを誓っていたのである。
「お名前は何と…？」
「リキ」
「リキさま。私は弥輪と申します。もう幼い頃からここに仕えておりましたから外のことはよくわかりませんが…小さな頃の貴方を覚えております。阿伽具さまと一緒にいらっしゃったとき、私は先代の後ろに控えておりましたから…」
「――」
「潮の香りと、不思議な雰囲気を持ってらして…私自身、不思議で仕方ありませんでした」
少女の話すことがわかったようなわからぬような…。それでも、淡々と話す彼女の言葉に耳を傾けていた。
「……一生……」
「え？」
「一生、ここで暮らすのか…？」
「はい」
「ずっとずっと一人で、ここで暮らすのか？　郷の娘のように好きな男ができても一緒にいれないのに…？」
「……。宿命ですわ。この霊力を持って生まれたものの宿命です……」
巫女姫のかおに哀しげな色が広がる。
反面、何故少年がこんなことを言うのか不思議に思う気持ちが見え隠れしていた。

「俺と一緒に行こう」
「……！？」
「行こう！　船に乗って遠くへ行けば、誰も追っては来れない」
リキは少女の手をとり、必死で訴えた。彼女の面に迷いの色が浮かぶ。行きたい気持ちが胸の奥でむくむくと大きくなってくる。
しかし。
「いいえ」
思いと一緒に、手を振り払った。
「行きませぬ。…申し訳ございませぬ…。私はすでに神のものとなっております」
手をつき、頭を下げた弥輪がふるえている。
「なぜだ…。なぜ、神がお前を縛る？！」
少年の心に神に対する怒りが吹き上げた。祭壇を睨み付ける少年へ、少女は首を振った。
「いいえ！　縛られてなどおりませぬ！　このような力を持って生まれたことこそが、私が選んだものなのです。選んで生まれてきた以上、まっとうせねばなりませぬ！」
はっきりと拒絶されたリキに何が言えたろうか？
少年は、そしてそのまま逃げ出すように走り去ってしまった。
振り返ることもせず――。

※

「…リキにとっちゃあ、あの一瞬が恋のすべてで、あの言葉がすべての終わりだったんだろうなあ…。恋なんてもんは、永い時なんか全く意味のねえもんになっちまうときがある…」
饂飩屋の翁は饂飩屋らしからぬ言葉を紡ぎながら、白湯をすすっている。
かなしいかな、カイにはそれがおかしなことだと気づけなかった。
リキや阿伽具は半島の言葉を喋り、物を計ったり、字の読み書きを

普通にこなしていたのだから、なんら不思議なことだとは思わなかったのだ。
強いて言えば、この老人がリキやカイのように若い時があって、きっとそういう経験をしたのだという、”若いとき”というのが想像できなくて不思議に思ったくらいだった。
そして、ふと、昨晩のリキの言葉を思い出していた。
あの時、リキの心には一体何が浮かんでいたのだろう？
結ばれることはなかったのに、リキは巫女姫への思いをまだ持っているのだろうか？
「おっと、そろそろ戸を開けないとな」
「じゃあ、俺は帰るよ。ありがとう、じいちゃん」
「おう。またな、坊」
カイは翁のうちを出て、ぼんやりと通りを歩いていた。人の通りも賑やかになりつつある。それを通り過ぎると先日、少女を見かけた路地に出ていた。
「――――」
リキの昔のことを聞いたせいか、あの浮かれるような気持ちはすっかり落ち着いてしまっていたため、少年は山辺の小道をずっと上へ登って行った。
さらに丘になっており、登りつめると小さな社がぽつねんと建っている。そこに野花がそえられていた。
海に向って岩に座ると、太陽の光に輝く沖まで見渡せた。その小さく見える波をぼんやりと見つめる。
胸にこつんと笛があたった。
「……」
ひゅいぃ
ぴぃひょう　ひょうう
ひゅうい　ひゅう
音色は高く、低く、強く優しく、人の心を突き動かす力を秘め、周

囲に響いた。
カイは、一心に吹き続け、やがて心の波もおさまったのか、笛を唇からはなした。
「だれだ？」
ふいに、強く問われて木の陰から赤い着物の少女がおずおずと出てきた。
「……」
先日の少女だった。カイはしばし驚いたように少女を見つめた。
「ご、ごめんなさい。あの、あんまり綺麗な音だったから…」
「あ、いや…」
我に返って照れたように応えたが、ふと、聞いてみた。
「この島にずっと住んでいるのか…？」
「ええ。あなたは？」
「俺は大伯という郷から来た。ほら、あそこに大きな帆船が見えるだろう？　あれに乗って来たんだ。あと数日したら半島へ行くんだ」
「半島へ…」
少女は見たこともない国を透かし見るように海を見つめた。
「半島って、どんなところ…？」
「そうだな…。俺も一度しか行ったことがないからよく覚えてないけど。栄えた国らしいよ。言葉が違うし、多分、着ている物も違うんだろうな」
「ふうん…」
物珍しそうにしている少女に少年は名前を訊いた。
「咲羅」
「サクラか。俺はカイだ。もう船に戻るよ。じゃあ！」
にっこり笑って、身軽く岩から飛び降り、登ってきた道を駆け下りてゆく少年の背を、少女は名残惜しそうに見送ったのだった。

※※※肆

船上は騒がしかった。
ざわざわと水夫たちがざわめき、右往左往している。この船にしては珍しいことだった。
梯子をひょいひょい渡って、目ざとくリキを見つける。
「どうしたの、リキ？」
少年の声に、いつになく渋い表情のリキが振り返った。
「――コレですよ」
名を口にするのも憚られるといった感じで、手に掴んだモノを持ち上げた。
「げっ！　へ…」
カイが危うく口にするところを、そばにいた水夫の大きな手がふさいでしまった。
「馬鹿野郎！　うかつに口にすんじゃんねえ！　祟られたらどうする！」
「ごめん」
ふごふご謝った少年を解放してやり、水夫と少年はリキの手の中でうねうねとのたうつ大蛇をまじまじと見つめた。青大将らしい。
屋敷にあっては守り神とも呼べる蛇だが、船にあっては禁忌以外のなにものでもない。
リキが渋面でいるのも当然であった。
「こりゃあ、早ぇとこ祓いの儀でもせにゃなあ、リキよ…」
「ああ。急いで蕨を持ってきて、祭壇をしつらえよう」
リキの指示に水夫たちが動き出した。

古代からワラビ文などは王の墓などに蛇除けとして用いられているが、船乗りたちが蛇を忌むのは航海が長引く上、船霊が嫌うからだという。
ちょうどこの時期、蕨が伸びてくる季節でもある。山に分け入れば難なく手に入れられるだろう。
リキは蛇を船から降ろし、叢にはなした。古より祖霊として祀られている生き物である。船を蛇の血で汚すわけにもゆかぬので、逃がす以外ないのだ。
とりあえず、船では祓いが行われることになった。
すみからすみまで、真水で洗い流す。大きな船だ。たちまち総動員しての大掃除になった。カイも藁束を持ち、甲板や船べりをガシガシ磨いていた。
それがすんだら、とってきた蕨を帆船の船先、帆柱、船の出入り口という出入り口すべてにとりつけた。
「なんか、青臭いなあ…」
少年は顔をしかめてぼそりと呟いた。
終ればあとは何事もなかったかのように、水夫たちは己の仕事にとりかかった。

翌日の日が中天に昇る頃。
「おーい！　カイ！」
水夫が下から呼んだ。
少年が船べりから顔を覗かせると、水夫は意味ありげにニヤリと笑って
「降りて来い」
と、一言だけ言った。――水夫の傍らに、咲羅が立っていた。
「あっ」
カイは声をあげて、慌てて下へ降りた。
「おっ、カイ坊」
「なんだなんだ」

「カイ坊の女か？」
野次馬の水夫たちが、わらわらと集まって来て下を覗く。
「おお、リキ！　こっち来てみな。カイの坊やが女なんかつくったみたいだぜ」
「――」
リキもひょいと下を除いて見た。
カイは咲羅から何か包みを受け取ったみたいだが、上のほうからの冷やかしにたまりかねたのか、チラリとこちらを見やると少女を促し、船から離れていった。
「おお、おお。カイの奴もいっちょ前になったもんだなあ…。この船に初めて乗ったときゃこーんなに小っちぇかったのによ」
「おおよ。リキにへばりついて離れなかったなあ」
「いつだか、海賊が入り込んで来た時にゃヒヤリとしたが、あいつはリキにしっかりくっついてて泣きもしなかった。俺ぁ、あん時こいつぁいい海の男になるなって思ったよ」
「そうだった、そうだった。泣きもしなかった」
いつのまにやら――。
水夫たちは昔を懐かしむように穏やかな目で笑いつつ、甲板の上で円座になって話しはじめた。

　カイは船からだいぶ離れた所まで少女を連れ出した。
「はあ、まったく。年寄りは野次馬が好きでいけねえや…。えと。どうしたんだ？　こんな所に来るなんて…？」
嬉しさを押し込めすぎて、つっけんどんになってしまったような気がした。
「あ、あの…。ごめんなさい。これを…」
少女は少年に渡した包みを指して、
「かあさんが煮たの。食べてもらおうと思って…」
咲羅がうつむいてしまった。カイは少女を見、包みを見、そして、つっけんどんになってしまったのを激しく呪った。

「あ、ありがとう。開けてもいいか？」
こくんと少女が頷くのを見届けて、包みを開くと、焼き物の鉢に、煮たイイダコが盛られてあった。
「あっ、タコだ」
言うなり、カイはヒョイと一つを口に放り込む。
その所行に唖然とした少女の前で、タコを飲み込んだカイはにこりと笑った。
「美味いよ。かあさんに礼を言っといてくれ。あとはリキにも食べさせてやろう」
海から風が吹いてきた。
後方にはなだらかな山々が連なり、山吹のあざやかな黄色が緑を彩っていた。空も海も青く、人の心を開放させる力にあふれている。
少年は、ふと昨日の出来事を口にした。
船の中で蛇が見つかったこと。大騒ぎして蕨をとってきたこと。祭壇を設けて祓いの儀をしたこと。
少女は気の毒そうに”まあ…”と呟いた。
「船に乗る人は蛇をきらいますものね」
「うん。リキは…あ、俺のオヤジみたいな人なんだけど。あの船の船長で、普段はちょとやそっとじゃ動じないんだけど、今度ばかりはこーんなカオしてさ」
と、少女にしかめっ面を見せると、咲羅がプッと吹き出した。
ひとしきり笑ったあと、少女は思い出したように少年を呼び止めた。
「カイ、あの、あまり良くない噂なのだけど…。海を旅するなら一応耳に入れておいたほうがいいと思うの」
「……？」

カイは走っていた。
妙な胸騒ぎがしてくる。
咲羅が教えてくれたのは、つまりこういうことだった。
ここ最近、この近辺の沖合いで巨大な妖物を見る者が多いというの

だ。
ある漁師の舟は舟ごと丸呑みされたといい、ある時は大きな許都魚の残骸が広範囲に渡って海に浮いていたという。
その正体も全くわからず、天気などにも左右されないようで、漁師の間では密かに恐れられているのだった。
（舟ごと丸呑み…？）
カイは背筋に冷たい汗が流れ落ちるのを感じた。
計り知れない大きさである。何よりも不気味なのは、その妖物が現れる前日には必ず大蛇が海べりか船上で発見されているということだ。
（リキに伝えなきゃ…！）
少年は必死に走った。大きな船が目に映る。
「リキィッ！」
少年は恐怖を振り払うように叫んだ。

リキをはじめ、主だった面々が円座になっている。昼間とは打って変わって重苦しい雰囲気だった。
船長であるリキは眉間に深いしわを刻み込んで、しばらく腕組みをしていた。
灯りを囲んで、黙り込んだまましばらくたっているが、妖物に対しての策が見当もつかず、途方に暮れていたのだ。
カイがおずおずと言った。
「あの…饂飩屋の翁は何か知らないかな…。妖物退治の方法とか…」
「おやっさんか…」
「あとは神官に聞くか」
「うむ」
「俺、とにかく、翁のとこへ行ってみるよ！」
少年はそう言って船室を飛び出した。
「カイ！」
矢のような勢いで出た少年を慌てて止めようとしたが間に合わなか

った。
「仕方ない奴だ…」
「なあに、お前さんだってあんなものだったさ」
リキが苦笑して呟くのに古株の水夫が笑って言い返す。
「頼むからカイに言わないでくれよ？　ますます激しくなりそうだから」
どっと笑いこけた水夫たちに、リキはいつもの泰然とした口調で指示を出した。腹が決まったようだ。
「社に行ってくれる者は…赤夷と辛か。頼む。後のものは万一のことに備えて身辺を固めてくれ」
「ようそろ」

　真っ暗な道をひた走り、カイは肩で息をしながら翁の家の戸を叩いた。
「じいちゃん！　俺だよ、カイだ！　開けて！」
しんと静まり返った近辺に声がこだます。しかし、翁はいっこうに出てくる気配がない。というより、中にいる気配がないのだ。
「……？いないの…？」
「船乗りの坊やかい…？」
隣の家の老人が戸口から顔をだし、眠そうな目で隣の親父なら今時分は漁だと教えてくれた。
「なんだって！？」
真っ青になって、どこで漁をしているか尋ねる。
「そうだなあ…与島までは行ってはいないと思うが。この近辺だよ。小舟で行ってるはずだ」
老人の言葉が終らぬうちに少年は飛び出した。
「おい、坊や！」
「だれか妖物退治に詳しい人を連れてきてくれ！翁が危ない！」
振り返りざまに叫ぶと、カイはもうひたすら帆船に向って走った。
翁を妖物の犠牲にするわけにはいかない。

もう日はとっぷりと沈んでしまっている。小舟とはいえ、灯りも持たずに行くことはあるまい。

船によじ登るようにして入ると、リキに報告した。

小舟で出たところで何ができよう？　リキは数人を陸に残し、すぐさま帆船を出すことにした。

腕におぼえのある水夫も、妖物相手となれば少々勝手がちがう。

戸惑いはあるものの、だが臆する者はなかった。

リキは少年も陸に置いていこうとしたのだが、案の定、猛反発をくらってしまい、仕方なく連れていくことにした。いざというときは自分の身を盾にしてでも少年を護らねばと密かに心に決めて。

「リキ！　灯りが見える！！」

「よし！　合図を送れ！　岩に気を付けろ！」

このあたりは小さな小島が点在し入り組んだところだ。いかな玄人の水夫でも、油断すれば座礁してしまう。しかも、瀬戸内は潮の流れが複雑だった。

暗闇に溶け込み始めた沖合いへと、帆船は進んで行った。

「おやっさーん！」

「おーい！」

カイ、リキ、水夫たちは口々に大声を張り上げ、明かりに向って叫んだ。

「もう少し右だ！」

「おう！」

船がゆっくりと右に曲がり始める。

カイは先端へへばりついて灯りが揺れるその小舟に目を凝らした。

小さな灯火が、波の動きにあわせてゆらゆらと揺れている。船が近づくにつれて、小舟もはっきりと見て取れるようになった。

「じいちゃん！」

「おやっさん、無事だったか！」

男たちが呼びかける。

――しかし。
小舟の上に、うずくまるようにしている翁の黒い影は、そんな声にも反応を見せず、ピクリとも動かなかった。
「――――？」
訝しく思い、一人が綱をおろして軽やかに小舟に降り立った。老人の肩に手をかけ、
「おい、おやっさ…」
ぐらり。
老人の体はそのまま…
「うっ…うわあああ」
「どうしたっ！」
「おいっっ！」
水夫の悲鳴に、船上は騒然となった。
「ねえ！　じいちゃんは？　どうしたの？」
カイはもどかしげに身を乗り出し、綱を降りようとした。
「来るんじゃねえっ！」
鋭い一喝に少年はビクリと身を竦ませた。
「リキ」
「――――」
水夫はおそろしく低い声で船長を呼んだ。
リキは黙ったまま、カイを制しておいて綱をするすると下りていった。
はっと息を飲む気配。
降り立ったリキが目にした、かつて翁であった人間は、いまや。
先刻までかろうじて形を保っていた白骨は、さらさらと音たてて小舟の底に白い小さな砂山を作り上げた。血のあともない。
白い砂と翁の着ていた衣が形を失い、その場にくずれ落ちているのみ。
しばし、リキは自失の態からぬけ出せなかった。
昨日まではあんなに元気だったではないか。

しかも、翁はほんの一刻前にここに来たはずだ。こんな、骨までも砂に変わるほどの、一体なにがあったというのか…？
「リキ…？」
「来るな！――見ないでくれ…こんな……」
リキの声が震えた。
そのとき、
「うわあ！」
帆柱の上で悲鳴が上がり、ドサリとなにか塊が落ちてきた。
一瞬の――。
「は、白骨！？」
甲板に落ちてきた水夫の着物と砕けた骨の砂が、小舟の翁の姿を暗に物語り、男たちの背筋を冷たい汗が伝い落ちた。
その、愕然とする帆船のすぐそば。
闇から生まれたような、真っ黒な影が帆柱のすぐそばで、ぬらりとそそり立っているのに気づいたのはカイであった。
「妖物…！」
呟く声に、水夫たちは一斉に反応した。
上空に浮かぶ赤い二つの目が無表情に甲板を見つめていた。
その、不気味な赤い目が、一番年若い少年に止まったのと同時、少年の内側から沸騰するような熱いものがこみあげ、爆発した。
「翁を喰ったのはお前かっ！」
叫びはそのまま力となり、妖物の目から放たれた見えない力は少年にはじき返された。

ぐおおおおっ

不気味な唸り声をあげ、黒い影は己の妖力をまともにくらってグラリとかしいだ。
カイは怒りのままに水夫から青竜刀をひったくると、海中に逃げた妖物を追って海に飛び込んだ。

「カイ！」
騒然となる中、リキは蒼白になりつつも少年を追って海の中に踊りこむ。
ぐおおおっ
妖物は頭を激しく振りながら深く潜ってゆく。少年がぐんぐん速さを増し、水圧などものともせず目前にまで迫った妖物の尾ひれを引っつかみ、青竜刀を叩きつけた。
ギャアアアッ！！
激しい鳴き声をあげ、身をくねらせ、めちゃくちゃに暴れだした妖物はすさまじい水流を起こした。さすがにこれには抵抗できず、これ幸いに追いついたリキが少年の身体をしっかと抱えて水面へと浮上した。

「ゲホッゲホッ」
したたか水を飲んだ少年は、しばらく荒い息をついていたが、やがて、なんとか上体を起こせるようになった。
「無茶をする」
ごつんとリキのげんこつが入る。
「いてっ！…ごめん…」
「うーん…しかし、カイ坊。こりゃすげえぞ」
「ああ。魚のようだが違うな。こりゃ一体なんだ？」
水夫たちは少年が握りしめていた妖物の尾ひれをしげしげと見つめた。
色とりどりの鱗がびっしりと生え、光に照らせば七色に輝いた。
「きれいだね…。気づかなかった」
カイは鱗のきらめきに目を細めた。
何故こんなに美しい鱗を持つ生き物が、一瞬にして人を白骨に変えてしまう妖力をもっているのだろう？

その翌日、翁と水夫の弔いが船上で行われた。

海に生きてきた人々だ。海にかえしてやるのが一番自然だろう。
白い砂が夜明けの日に照らされて輝き、さらさらと海へ流れていった。
一同は合掌して見送った。
「…翁がね、言ってたよ。この足を許都魚にくれてやったから少しは腹の足しになっただろうって。喰い喰われが掟だって…」
カイは呟くように言った。
リキの手が少年の頭に置かれた。
「そうです。生きるために…。しかし、妖物はそうだと思いますか…？」
その声音にどれほどの怒りがこめられていただろう。
男の横顔にはまったく、なんの表情も浮かんではいなかった。だが、胸中には計り知れぬ思いが渦巻いているはずである。
リキ、カイをはじめ、水夫たちの胸の奥には、妖物をこのままにしてはおかぬという強い思いが楔のように打ちこまれたのだった。
そして船は一旦、児嶋の津へと引き上げた。

AWATSU－3－

※※※伍

リキや主だった面々が児島の津の長老のもとに赴いたのは昼前だった。
木箱に納められた妖物の尾鰭を目にして仰天した長老は、すぐさま巫女長を呼び寄せた。
長老の館の一室にリキとカイ、他数人の船乗りと、向かい合わせに長老と年老いた巫女が尾鰭を前に考え込んでいた。
物珍しさと怖いもの見たさ半々の様子で長老が箱を覗き込む。
「ふうむ…。ウワサは聞いておったが、これを見なければ信じがたいことじゃ」
「不穏な気が流れているは都だけと思うていてはいかぬぞ、長老。しかし、これは…」
老巫女は暢気な長老をじろりと睨んでから、しばらくその皺だらけの顔に、さらに気難しい皺を刻み込んで思案していた。
こんなモノが出没するなど、かつてこの瀬戸にはなかったことだ。
猟師たちの間で不穏な噂が立ち始めたのはほんの数ヶ月前だった。
「…伊都岐嶋の姫巫女ならば、ひょっとすれば…」
老巫女の言葉にわずかに反応したのはリキと、そして、カイであった。
「伊都岐嶋の？　しかし、弥山の姫巫女では…」
「そうじゃが、あの方はすばらしい霊力をお持ちじゃ。ひょっとすれば、この妖物を鎮める方法をご存知かもしれぬ」
水夫と老巫女のやりとりを聞きつつ、カイは隣のリキを盗み見るように横目で伺った。

リキは静かに目を閉じ、その端正な面には何の表情も浮かんではいなかった。
「――――」
やがて、リキは静かに告げた。
「わかりました、伊都岐嶋へ行ってみましょう」

月の明るい夜だった。聞こえるのは打ち寄せる波の音だけ。カイが甲板に上がってみると、船べりに人が立っていた。
少年の気配に気づいたのか、その人がこちらを振り返った。
「…カイ？」
「うん」
満点の星と、月光が闇夜を青く照らしている。少年はリキの隣に立つと、船べりに頬杖ついて水面に目を落とした。
「――明日、伊都岐嶋で妖物を鎮める方法を聞きましょう」
リキが静かに言い、そして、苦笑した。
「…翁から、聞いたんでしょう？」
ハッとして顔を上げた少年は、男の顔を見つめ、観念したようにこくんと頷いた。
翁と約束した「夢の中のこと」には、この男に対してはできるものではなかった。彼はきっと、あの老巫女の呟きに反応した少年を見て悟ったのだろう。リキのあの一連の出来事を知っているものはほとんどいないのだ。
「…弥輪とはもう十年以上も会ってはおりません。カイと同じくらいの時のことですからね」
にこりと笑う男に、少年は意を決して尋ねた。
「リキが女房をもらわないのは、姫巫女がまだ好きだから…？」
少年は、ひょっとしたら今の自分と重ね合わせていたかもしれない。奇妙な感情を覚えるのは、咲羅といるときだけだった。だから、自分も十年たってもあの少女に対して奇妙な感情を持ちつづけるもの

なのかと…。
しかし、男は苦笑して首を振った。
「さあ、どうでしょうか……。もう自分の妻にはならぬ人だとわかっていてもしばらくは…悩んだ時もありましたよ。確かに、あの時のことは鮮明に憶えています。しかし、今となってはもう思い出として残っているだけです。――大津の皇子様から貴方をお預かりしたとき、私はあの方に誓ったんです。貴方を必ずお護りすると。あの日から父と私は貴方の成長を見つめてきた。それでどうして妻がいりますか？」
「――――」
「これで良かったんですよ。もしかしたら、もう一度くらいは、別の恋しい女が現れるかもしれませんがね。…カイ？」
青年の逞しい胴を、カイはぎゅっと抱きしめた。
「俺のことなんかほっといて女房さがせよな」
大きな手が頭に置かれた。
父のようで、兄のようで、師のようで、友人のようで…。カイにとっては生まれた都や殿上人たちなどより、リキや阿伽具が何より一番大事だった。
「ただ…後悔していることが、一つあるんですよ…。弥輪をひどく傷つけてしまったことをね……」
小さく自嘲気味に呟かれたのは、リキの独白だった。

翌朝、リキたちの帆船は伊都岐嶋へ向けて出発した。カイは見送る咲羅に手を振って別れた。
一瞬にして白骨になるほどの妖力。――しかし、それさえ跳ね除けたカイの生命力に児嶋の老巫女も感嘆したものだが、結果思わぬ展開になってしまった。
老巫女は別れ際、少年に小さな銅鏡をくれた。そして妖物を切った青竜刀に降魔の祈りを込め、少年に手渡した。

「よいか。この刀はそなたの強い気を受け、そのまま妖物を切ったのじゃ。恐れはこの刀さえも弱くすることを忘れてはならぬぞ」
カイはこくんと頷き、その言葉を心にとどめた。

点在する小さな島々を過ぎ、因島、安芸津、呉と進み、そして、目前に伊都岐嶋が見えてきた。
風も良好で、雨にもあわなかった。しかし、この海中のどこかにあの恐ろしい妖物が潜んでいるのだと思うと、いかな百戦錬磨の海の男たちも背筋に冷たい汗が流れていくのをどうすることもできなかった。
だが、伊都岐嶋が見えたことによって、多少、男たちの心にゆとりが戻ってきたようだった。
帆船が津に入り、一行が姫巫女のいる弥山の奥宮へと登っていった。坂の上で少女巫女が待っていた。
「姫巫女さまがお待ちでございます」
丁寧に頭を下げた少女が、ふと、少年の手の中の木箱に気づいて怯えたように見つめ、少年に目を向けた。まぶしいような相貌の少年に、少女巫女は恥ずかしそうにうつむいて、足早に姫巫女の待つ宮へと歩いた。
（この子も霊力があるんだろうか…？）

海をはさんだ本島の海辺の村には霊力者が生まれる村が多くあるようだった。姫巫女もその中で強い霊力を発揮したためにこの伊都岐嶋の巫女となったのだろう。
カイには、それらしいものはまったくない。しかし、父譲りの剛毅な性格はそのまま彼の生命力となっているようだ。
「ほんに羨ましい…」
老巫女が言った意味深な言葉が思い出された。
「人というものはその魂が強いほどに、また身体もそれに見合った器であればこそ、それはそれは大きな存在となるものじゃ。我らの

ように偏った力はいずれ我が身を滅ぼすもの…。坊、体を鍛え、心を鍛えて強うなるのじゃ。それが、坊自身を護ることになるのじゃから」

「ようこそ。さ、ここへ…」

少年の回想は、姫巫女の凛とした声にパチンとはじけた。

堂室の祭壇の脇に、透けるような肌の人とは思えぬほど美しい女が座っていた。

ふわりと微笑い、一同を招くように白い手が誘う。姫巫女は、一度だけリキに目を向けた。

男はただ黙って一礼したのみだった。

リキは児島の津での出来事をかいつまんで説明し、数ヶ月前から不気味な噂が流れていたことなどを姫巫女に話した。

「我々が目にしたのは黒い巨大な影のみですが、この…カイがその妖物の一部を持ち帰りました」

リキに促され、少年は持っていた箱をそっと姫巫女の方に差し出した。

巫女がカイの手から木箱を受け取り、静かに蓋をあけたとたん、ハッと息を飲んだ。

「これは…」

七色に輝く妖物の尾鰭は、時をおいてもなお輝いて力を放っているようであった。

「これは、海竜王の…」

「え…？」

「海竜です。海におわす竜神です。……なにゆえ竜王が人を…？」

不思議そうに首を傾げた姫巫女は、ふとカイに目を移した。

首からさげた鏡と脇に置いた青竜刀に護られるように、少年は座っていた。

「巫女さま、竜神とは本来人は襲わぬものなのですか？」

少年の言葉に深く頷いて、姫巫女は木箱の中に納められた竜神の尾

鰭を見つめて言った。
「海底を統べる長が、どうして人の命を奪いましょうか。……ここのところの異変は瀬戸の、というよりもむしろ……ひょっとしたら、竜王は何者かに操られているのやもしれませぬ」
「操るって、一体だれが…？」
「わかりませぬ。強い術を操る者であることは間違いありませぬ。海竜王を縛る何者かを突き止めなくては――。おそらく、なんらかの術で魂を縛られている故に、御体を操られているのでしょう。」

「おい、あれ！」
津に残っていた水夫の一人が声をあげた。指差す沖の方が沸き立っている。
雲が流れ始め、黒雲が覆うように広がってきた。波がさざなみたち少しずつ高くなっている。
「リキに知らせろ！　あいつが追って来やがったのかもしれねえ！」
「おう！」
奥宮へ駆け出していく水夫。残るものは青竜刀を構え、魔除けのまじないを呟いた。

「リキ！　海がおかしい！　あいつかもしれねえ！」
外の水夫の叫び声に、リキたちははじかれたように立ち上がった。
「相手は術者です。油断してはなりませぬ」
姫巫女の警告に頷くと、カイは青竜刀を引っ掴み飛び出していった。次々に宮を飛び出し船に戻る水夫たちを、少女巫女があっけにとられて見送った。
リキの一礼に姫巫女も頷き返し、祭壇に向った。
　津は騒然となっており、一同が戻るのをじりじりと待っていた。
妖物はその不気味な黒い影を波間に覗かせながらこちらに向っているようであった。

「みんな、気をつけろ！　その海竜は術者に操られているんだ！」
「なんだって！？」
ざわりとひろがる不安の中へ、しかし、少年は雄々しく飛び込んでいった。
「ひるむな！　強い心さえ持っていれば妖術は跳ね返せる！」
それは、つい先日、少年が証明してみせたことだ。
男たちはぐっと腹に力をこめて少年に頷いてみせた。
突然、津波が襲いかかるようなすさまじい水しぶきが上がり、
「来たっ！」
誰かの声に一斉に上空を見上げた。
カイは青竜刀を構えた。その胸に児嶋の老巫女がくれた鏡が雲間の陽光に反射して輝いていた。

「む？！」
祭壇に向う姫巫女が、眉根を寄せた。
彼女の霊力は、カイがつけた鏡を通して妖物の姿を視ていた。彼女はその影にひそむ術者を見極めようとさらに霊力を高めていく。
海竜王の背後に、黒いゆらめきを見つけた。姫巫女はそれに向って強い霊力を放った。

ギャアッ！

いきなり海竜が身をよじらせ、頭を激しく振った。
「なっ、なんだっ？」
「おい、見ろ！」
水夫の一人が少年を指差す。
カイの鏡から一筋の光が真っ直ぐ竜にむかっていた。
「姫巫女が力をかしてくれたんだ！」
少年の声に、水夫たちの歓声が沸きあがる。
叫び声をあげながら、波を大きく蹴立てて海竜は身をよじり、海中

へと逃げだした。
「まてっ！」
「カイ！」
「船だ！　船を出せ！」
男たちの声が入り乱れた。少年の姿はすでに海中に消え、それを追ってリキも飛び込んだ。

晴れていれば光が差し込み、美しい姿を見せてくれるだろう海中も、黒雲に覆われて今にも嵐になりそうな空のもとでは暗黒の世界だった。
小さな魚だろうか、少年の頬をかすめて泳いでいった。
竜は更に沖へと向かってゆくが、少年もまた信じられない速さでそれを追っていた。
姫巫女の霊力がよほどこたえたのか、竜は時折よろよろと右へ左へと傾いだ。その隙を狙って少年は切断されたままの尾をしっかりと掴んだ。
「うっ…」
ゴボリと空気の泡が口から吐き出される。限界に近づいていた少年は、しかし、竜を放そうとはしなかった。
海竜が少年を振り払おうとぶんぶん尾を振りはじめ、少年の体は水圧と水流に翻弄された。
カイの後を追ってきたリキは速さを増して近づいてくる。
朦朧とし始めた少年の意識が、海竜の首に巻きついた黒い影を捉えたとき、
（カイ！　その影を剣で払うのです！）
姫巫女の声が響き、カイはありったけの力をふりしぼって青竜刀を投げつけた。剣は不思議にも海底に落ちなかった。それどころか、意志あるもののように海竜の首に巻きついた黒い影めがけ、まっしぐらに飛んだ。
黒い影と降魔の霊力の相反する力がぶつかり合ったとき、轟音とと

もに大爆発を起こした。
力尽きた少年を抱いて水面へと上がってきたリキと、船でこちらに向っていた水夫たちの前にひときわ大きな水柱がたち、巨大な白銀に輝く竜が中空に踊った。
「おおっ！」
その美しさに思わず声をあげた彼らの前から、大きな水音をたてて海竜は海の底へ消えた。

※※※陸

気を失ったカイは姫巫女の奥宮へと運ばれた。心配げな顔の少女巫女が湯の用意に身を翻す。
「さ、こちらへ」
姫巫女が庵の中へ案内し、リキはそっと少年を横たえた。
海水を大量に飲み、信じられないほど長い時間海水に潜っていたため、死に至るほどの昏睡状態に陥っていた。
「――――」
カイの傍らに座ったリキは沈痛な面持ちで少年を見つめ、近くの水夫に言った。
「このままでは凍えてしまう。摩擦する」
リキは少年の冷たい手を己の手の中で擦り合わせた。

そうして一晩中、彼は養い子の命を救うため少年の身を温め続けた。

暗く、冷たい。
（ここはどこだろう…？）
少年は呟いてみる。
足が妙にふわついている。見れば、自分は宙に浮いているではないか。
帰らなければ、と思った。しかし、一体どうやって…？
（おーい！　おーい！）
大声を出してみた。
（おーい！　リキ！）
信頼する男の名を呼んでみた。
（おーい、誰かいないか！）
闇に自分の声が吸い込まれていく。
（帰りたいか、坊？）
しわがれた声が聞こえた。
（だれだ？）
（わしだよ、坊）
闇にぼうっと浮かんだ人影。――それは饂飩屋の翁だった。
（じいちゃん！　どうしてここに…？）
（竜のヤツに喰われたからさ。知ってるだろう…？）
（違うよ。あれはね、妖術師が操っていたんだ。俺、竜の首に黒いものが巻きついてるのを見たんだ！　海竜王は自由になったんだよ。翁を殺したのは海竜王じゃない。妖術師なんだ）
海を愛し、その海に生きるものたちを愛した老人だ。
カイは翁が愛したものが翁を殺してしまったのだと誤解したままでいてほしくなかったのだ。
（妖術師とな？いいや。あれは竜の力だ。わしはあの竜にやられたんじゃ…くやしや…くやしやのう…）

（じい……）
少年は言葉を継ごうとして、ふと眉根を寄せた。
老人の足。
あの痛ましい傷跡が全くないのだ。そのかわりに着物の袖からのぞいた腕に走る生々しい傷。鋭利な刃物で切られたときのような…。
（――――。お前、饂飩屋の翁じゃないな）
（む？）
老人が訝しげにカイを見る。少年の面には正体を見極めようとする厳しい表情が浮かんでいた。
（何でだ、坊？　わしは饂飩屋の翁じゃぞ）
（嘘だ。翁は海のために死んでも恨みに思うような人じゃない。それに、その傷。それは、俺がつけた傷だろう）
（ほ。聡い子供じゃの）
老人は鼻先で嘲い、あっさりと認めた。
翁の顔がぐにゃりと歪み、ゆらゆらとゆらめいた後、別の顔へと変貌した。顔…とかろうじてわかるような、からびて茶黒くなった、まるで木乃伊のような顔だった。
その窪んだ目だけが異様な光を放っていた。
（…お前は生きた人間じゃないな？！）
（――いかにも。というべきか、否というべきかな）
謳うように妖術師は言う。
（この力を手に入れるために、わしは何十年、何百年かも知れぬあいだ修行したよ。やっと手に入れたときには体はこのように干からびていたがね。しかし、そのようなことはどうでもよい。肉体が生きていようが死んでいようが、わしが存在していることには変わりないのだからな。――竜に乗移ってあの術を跳ね返したのは、ぬしが初めてじゃったのう…。ぬしは力強い魂を持っておるのう…）
にんまりと、木乃伊が笑う。
（…坊の名はなんというのかの？）
（誰が言うか）

（ほうほう。強情強情）
木乃伊の目がかっと燃え上がり、少年を捕らえた。
（坊よ、竜の背はよいぞ。どこへなりともひと飛びじゃ。さあ、共に行こうぞ。――名を言うのじゃ）
手足をばたつかせ、抵抗していた少年の体からがくりと力がぬけた。
（…まったくてこずらせよって…。名は？）
（俺の名…）
（そうだ、名じゃ）
（……）
（強情な奴。名を言うのじゃ！）
（……あ、粟津…）
（アワツ…？）
（粟津王）
（粟津王とな！？そなた皇子であったのか！父君は誰ぞ？）
妖術師の目がらんらんと輝きはじめた。
（父は…大津皇子…）
そこで、少年の意識は完全に封じられてしまった。
妖術師の体がぶるぶると震える。転がり落ちてきた、またとない獲物であった。
（大津皇子の皇子、粟津王とな…ホ…ホッホッホッ…よいものを手に入れた。ホッホッホッホ……）
妖術師の干からびた腕は、少年の体をヒョイとかつぎ上げた。
あとには闇――――。

日が昇る。
一晩中少年の体を温め続けていたリキは、ゆっくりと身を起こした。
心臓に耳をあててみる。しっかりとした鼓動が聞こえてきた。
リキは安堵の吐息をもらし、手水をもらいに立ち上がりかけた。
「う…ん…」

少年の声にハッと振り返る。
「カイ！」
「……」
カイの瞼がゆっくりと開かれる。
「…リキ…？」
「そうです。気がつきましたか…？」
起き上がろうとする少年に手を貸し、抱え起こしてやる。
「無事でよかった…」
我が子を慈しむように、リキは少年の頭をやさしく抱きしめた。
「ごめんよ、心配かけて…。もう、二度と心配させぬよう、そなたの憂いを払ってやろうぞ」
少年の声が別の者のそれに変わった。
「――――っ？」
リキが反射的に身を離したとき、少年の手に握られた長剣が彼の脇腹を貫いた。
「ぐっ…」
血を吐き、信じられぬようにカイを見つめた。
「カイ…？」
「いかにも。そなたの養い子はもうわしのものじゃ。ホッホッホ…中で坊が暴れとるわ。よほどそなたが大事とみゆる。じゃが、心配せずともその傷ではもう助からぬわ。双方の憂いを払ってやったのじゃ、安心するがよい」
「きさま…一体…」
「わしか？　名など忘れ果てたわ。さて、冥土のみやげに面白いことを教えようか。これから竜を制し、都を落としてやろう。積年の恨みを晴らす時が来たのじゃ」
くつくつと笑う妖術師が、片手を突き上げた。手首から先が消え、ほどなく虚空から短刀を引きずり出した。
「とどめじゃ」
少年の手から剣が放たれた。だが、すれすれのところでリキがかわ

し、少年の手に手刀を放った。
「ぬっ！」
「リキさま、朝餉の支度が…きゃあああっ！」
少女巫女が血の海で対峙する少年とリキを見つけ、悲鳴をあげた。
「ちっ！」
舌打ちし、少年に憑いた妖術師は庵を飛び出した。
軽く地を蹴り、ひょうっと飛び上がるとあっというまに林の中へ消えていった。
「リキさまっ！　リキさま！　しっかりなさいまし…！　誰か…姫巫女さまっ…！」
（カイ……）
リキの意識は深く、闇に沈みこんでいった。

AWATSU－4－

※※※漆

波が岩に打ちつける。雲は垂れ込め、空を黒く覆いながら迫っていた。
風が不気味なうなりをあげ、少年の衣の裾がはためいた。
「むん」
組み合わされた指を気合とともに沖に向って突きつける。
くぐもったしわがれ声が梵語を紡ぎ、それはだんだん激しさを増していく。
やがて沖合いの海面が泡立ちはじめ、ぐっと盛り上がった。海面の丘は大きくなりつつこちらに向ってくる。
そして、しぶきを上げて現れたのは白銀の竜だった。
その瞳は陽光に照らされた海の色のように蒼く、きらめきを宿し、妖術に反応して怒りをもって少年を見つめた。
「再び会えて嬉しいぞ、竜よ。この少年を覚えておるか？　ぬしの力を気合一つで跳ね返した子供じゃ」
海竜王の瞳がくるめいた。それを楽しそうに見やった妖術師はさらに挑戦的に言った。
「わしはこの子供を手に入れた。そなたの負けぞ、竜よ。大人しゅう我の言うことを聞くのじゃ」
竜の蒼い瞳に輝きが増し、風が逆巻く。波がうねるように立ちはじめ、雲が天空を走りはじめた。
稲妻が走り、その黄金の剣を地へ向けて放ちはじめる。
カッ！　と吐き出された青い炎をヒョイとよけた少年は、妖術師のしわがれた声で嘲笑した。

「負けじゃ、負けじゃ！　観念せい！」
海竜王の炎は次々に放たれ、爆音をあげて津のあちこちに大穴をあけていく。
嘲笑しつつ、その炎を軽々とよけながら妖術師が再び呪文を唱え始める。
「我に従え、輝煌よ！」
印を結んだ指をつきつけ、術を放った。
放たれた黒い呪いが触手のように竜に巻きついた。
すさまじい咆哮をあげ、身を翻して逃れようとした海竜王に飛び移り、更に呪いをあびせかける。
白銀の竜は徐々に抵抗の力を弱め、完全に屈してしまった。
「はーっはっはは！」
妖術師はカイの体を操り、そして今また海竜王を手に入れ、一気に空に駆け上がった。

重傷を負ったリキは、手当てを受けたものの意識不明であった。
意識を失う寸前、彼は駆けつけた姫巫女にカイが何者かに憑依されていること、都を目指すらしいことを告げた。
いま、姫巫女たちの必死の祈りが続いている。カイの身も案じられるが、今追ったところでどうすることもできなかった。
リキならば、妖物や妖術師に対抗する術を出してくれるのではないか――そんな確証もない思いが水夫たちにはあった。
その頼みである彼が瀕死の重傷で倒れたのだ。
致命的な一撃は少年の手によるものだろう。だが、あの子供がリキに対して剣を向けることは、絶対にありえない。それは水夫たちの誰もが知っていることだ。
そして、それを裏付けるかのように落ちていた、見事な装飾の短剣。
姫巫女によれば、昨日カイが放った青龍刀によって、海竜は妖術師

の術から開放されたはずだという。そして、海竜王から叩き落された妖術師は憑依の対象を竜王から少年へと変えたのだ。

一方、水夫たちの数人が、大伯の郷へと発った。
カイに憑依した妖術師がリキを害し、そして都に向うことを阿伽具に伝えるよう指示されたのである。
いま、姫巫女の要請を受け、伊都岐嶋に渡ってきた安芸津の巫女たちの祈りの声が弥山に響き渡っていった。

先刻から、耳を打つ音が消えない。
頭をふってみるのだが、”うわあん”という響きは頭の中からしているようだった。
（…なんの音だ…？）
男は呟いた。裸足に砂利を感じる。見れば、擦り切れて血が出ていた。
痛みを感じているのか、自分でもよくわからなかった。目を転じると、砂利はずっと先まで続いている。
――今までずっと歩いてきたような気もするし、そうでないような気もする。
振り返っても同じような景色だった。空はどんよりと曇って、霧が出ていた。どこからか水の匂いがする。川があるのだろうか…？
人影が見えた。ぼろぼろの衣をまとった老人がブツブツと呟きながら歩いてくる。
男は声をかけた。
（もし、ちょっとお尋ねしたい）
しかし、老人はまったく気づかぬ様子でブツブツ言いながら男の前を通り過ぎていった。
（――――？）
戸惑ったように見送ったが、男もその老人の歩いていくほうに進み

はじめた。なぜか一歩ごとに体が軽くなるような気がする。
水の流れる音が聞こえはじめた。やはり川があるらしい。砂利のあちこちに草や花が現れはじめた。
（ここは、どこまで続いているのか…）
しばらく歩いていると川が現れた。
さらさらと流れる水は澄んで気持ちよさそうだ。
見れば難なく渡って行けそうなほど浅く、陽光に輝く清流に魅せられたように彼は一歩を踏み出した。
（戻りなさい、リキ！）
突然の厳しい叱責の声に、彼は夢から覚めるようにハッと顔をあげた。
（だ、誰だ…！）
男は辺りを見回し、川の向こう岸に人影を見つけた。
目を凝らすと高貴な身なりの青年が厳しい表情で立っていた。
そして、その人物が誰であるのか解ったとき、
（み、皇子様っ…！）
男は仰天して叫び、とっさに跪いた。
まぎれもなく、十数年前、彼に息子を預け非業の死を遂げた大津皇子そのひとだったのだ。
（リキ、ここで何をしておる？）
（何を…？）
（そなたが今まであれを育て、護ってきてくれたことには感謝している）
（はっ）
（しかし、今、この時そなたに去られたら、あれはどんなに己が罪を苛み、つらい人生を送るだろう…そう思うといても立ってもおられなんだ…。リキよ、親の甘さだ。解ってはいるが、今ひとたび…ひとたびだけ、あれの元へ戻ってはくれぬか）
（皇子様…）
（妖術師に名を支配されたあれは己が身体の奥底に閉じ込められ、

必死に逃れようともがいておる。しかし、私にはそれを救うことすら許されぬ…）
（――）
（名とは、個を支配するものだ。海竜にせよ、あれにせよ。私とて大津という名の支配する宿命に従わざるをえなんだ。――そなたの名は？）
（――？　リキです）
（そうだ。どんな意味を持つ？）
（”ちから”です）
（うむ。”ちから”とはそなたの持つすべてのものを言うのだ。そなたには大いなるちからがある。それを忘れてはならぬ）
（はい）
（いま一つ。そなたはあれに”カイ”という名を与えた。何故に？）
（あ、は…）
（申してみよ）
（は。恐れながら。海のように強く大きくお育ちあそばすよう願いを込めて…。また、澄んでおられましたがゆえ…）
男は珍しくしどろもどろで答えた。大津皇子の面にはあたたかな笑顔が浮かんだ。
（海か…。よい名だ。力、海の名を持つ我が子は、たかが年経た妖術師に屈してしまうほど弱い子供か）
（いいえ！　決して！）
反射的に振り仰いだリキの目に映ったのは、あの時と同じ、莞爾と笑った大津皇子の顔だった。
皇子はゆっくりと頷いた。
（あれが好きな名を、そなたの全身全霊で呼んでおくれ。さすれば、あれは呪縛を解くだろう）
（粟津王さまのお好きな名…？）
リキは困惑したように大津皇子を見つめたが、しかし、皇子はそれ以上何も言わなかった。

（さあ。急ぎ戻るのだ。そなたが人生を終えた後にまた会おうぞ！
忘れるな、力！　名とは己が現す一番のちからぞ！）
突き飛ばされるように、リキは後方へと引き戻されていく。
（必ず…！）
小さくなっていく大津皇子の姿に、リキは叫び返した。

リキが負傷して、まる一昼夜がたっていた。
急使は船を止めることなく、全速力で牛窓の津へ向った。そして、津から早馬を駆り、一気に大伯郷へと入ったのであった。
阿伽具のいる屋敷が見えたとき、遣いの水夫たちは言い知れない懐かしさを感じた。つい先日出たばかりだというのに、だ。
「阿伽具さま！」
「おやじどの！」
若い水夫たちは喉も裂けよとばかりに叫んで、屋敷に駆け込んだのだった。

「都をな…」
阿伽具はひと通りの話を聞き終わり、しばらく考え込んだあと、呟いた。その声は苦々しく、重いものだった。
リキの負傷に関しては一言、
「その傷で命を落とすなら、あれにはそれだけの命しかなかったのだ」
そう言ったのみだった。
血気盛んな、リキを慕う若衆である。阿伽具の言葉に口々に反論を申し立てた。だが。
「甘ったれるな！　船に乗ることはすでに命がけだぞ！　一度海に出たからにはいつなんどき命を落とすかわからん、そのことを肝に銘じて腹ァ据えてかか！！」

厳しい一喝に、若い水夫たちは一斉にしょげかえってしまった。
「カイを何とかせねばならんな…」
老人の眉間に深い皺が刻まれた。
阿伽具とて、妖術を使う者の対処を知っているわけではない。術者に関しては、伊都岐嶋の媛巫女に任せるしかないのだ。
問題は、帝のおわす京の都だった。
彼が仕える主人より都へ進言してもらうほかない。しかし、その前に妖術師に憑依されたカイが帝の前に現れたらどうなるのか。
カイ自身は知らずとも、カイの相貌をみれば大津皇子の忘れ形見であることがわかる者もいるのだ。
そう…あれからまだ十数年しかたっていないのだ。帝はカイを亡き者にしようとするだろう。逆に、勢力をのばそうと虎視眈々と伺っている者たちには格好の餌食となるだろう。
阿伽具は、権力争いの泥沼を嫌というほど知り尽くしていた。彼もまた、一族と息子を護るために国を捨てた一族の長だったからだ。

長い沈黙の後、阿伽具は腹を決めた。
「秦様に、使いを。そして、大和の大伯姫皇子様にもだ」

※※※捌

雲の中を駆け巡る海竜は、安芸津、伊予をまたぎ海と陸に炎を撒

き散らしていた。
「はっはっはっ！　よい眺めじゃ！」
少年に憑いた妖術師は哄笑し、狂ったように海竜を上へ下へと走らせた。尾鰭を切り取られたままの海竜は均衡が保てず、ヨロヨロと体勢を崩してしまう。
「こりゃ！　しゃんと飛ばぬか！」
妖術師は叱責し、海竜の首を蹴りつけた。
「帝に取り入れば京はわしのものじゃ！　粟津王よ、そなたの父の仇もとれるぞ！　倭国の帝となるのはこのわしじゃ！　はっはっは…そうれ、あの島を壊してやろうぞ！」
（やめろっ！）
妖術師が伊都岐嶋を指差したとたん、少年が妖術師の縛を揺るがすほどの力で制止した。少年の顔が苦痛にゆがむ。
「くっ…まだ抗うとは…」
（許さんぞ！　リキを刺して、あの島まで手を出すことは絶対に許さん！）
「ぬっ…」
妖術師が少年の身体からはじき出されそうになる。それを渾身のちからでもって押さえつけようと妖力を強めた。
一瞬、海竜の首に巻きついていた術師の術にゆるみができた。海竜は高く強く咆哮し、凄まじい神力を発して妖術師を振り落とした。
「わ…っ！」
海竜を縛っていた妖術師の術は完全に破壊され、一度伸び上がった海竜は海に落ちていく術師を捕らえるため方向を転換した。
急降下してきた海竜の爪が少年を掠め、衣が引き裂かれ皮膚を切りつけた。
思わず身をよじったその懐から大津皇子の笛が滑り落ちた。
「ちちうえっ…！」
カイは咄嗟に手を伸ばしたが、笛は海中に飲み込まれてしまった。
落下しながら、自分を覆った影にはっとして上空を見、そして、目

に飛び込んできたのは鮮やかな青だった。
「……」
一瞬、見惚れてしまった。
それは、海竜の目だった。
なんという青！　澄んでいて、しかも深い。懐かしい、優しい、あつい…その諸々の思いが詰まったような…。
少年は思い当たった。
（海だ…。晴れの日のきらきらする海…ああ、そうか…）
「俺と同じ…」
微笑んで呟いたのもつかの間、再び少年に憑依した妖術師はすかさず印を結ぶ。
「むん！」
カッと目を見開き、間近に迫った海竜に向けて気合もろとも妖術を叩きつけた。
バシッという音ともに黒い触手が竜の首に巻きつき、再び制したかに思えた。だが、妖術師の呪いはもろくも跳ね返されてしまったのである。
「なんじゃとっ…！？」
信じられない事態に妖術師が呆然とする。
海竜はふと首をもたげると、いきなり伊都岐嶋へ向って身を翻した。
「っ！　しまった！姫巫女め…っ！」

姫巫女の奥宮では巫女たちが祈りを強め、祭壇には海竜の尾鰭が祀られている。
（こちらです、海竜王よ。こちらへいらっしゃれば御体をお返しできます）
強い祈りを込め、姫巫女は竜王を呼んだ。
「姫巫女様！　あれを…！」
少女巫女が叫んで上空を指差した。

奥宮のすぐ上に、白銀の竜がとぐろを巻くように浮いていた。
安芸津から来た巫女たちも息をつめてその美しい姿を見上げていた。
姫巫女が尾鰭の木箱を奉げ持ち、表へ出てきた。そして、彼女もまた、輝くようなその姿に見惚れてしまった。
「海竜王よ、お返しします」
海竜に呼応するように、切られた尾鰭が輝きを増し、きらきらと光を放ち始めた。
「おのれ！　させるか！　無駄じゃと何度言わせれば気がすむのじゃ、？煌！」
空中から鳥のように飛んできた少年――妖術師――は、しかし、またしても海竜の神力に跳ね飛ばされ地面へ叩きつけられた。
尾鰭は母のもとへ帰る子供のように勢いよく木箱から飛び出すと、海竜の切断された尾へくっついた。
ひときわ輝きを放ったあと、まるでケガなどなかったかのようにゆったりと尾が揺れた。竜王は満足げにもとに戻った体をゆるゆると動かした。
一方、地に叩きつけられた妖術師は己の手を見つめていた。
「わ…わしの術が衰えてきたのか…？！　急がねば…！」
愕然と呟くと慌てたように身を翻し、もう海竜にも伊都岐嶋の姫巫女にも目もくれずに本島へ飛び立った。
「待て！」
「どこへ行く！」
数人の水夫が怒声をあげ、妖術師を追って駆け出した。
鳥のように逃げ去った少年の背を不安げに送った姫巫女は、思い切って海の神に尋ねてみた。
「竜王よ、あの少年にとり憑いた妖術師を払う術はありませぬか…どうぞ、お教えください」
海竜は、その巨大な頭をゆっくりと振った。
「――では、あの子はあのまま…？」
（あれはあの子供自身の力でなければ落ちぬ。しかし、我にかけら

れた術が解けたのもあの子供が縛を揺るがしたがゆえ…。鍵は…）
海竜の青い目が、庵の中に横たわる瀕死の男をさした。
「…リキさま…？」
（冥土の手前で引き戻されたようじゃ）
海竜が巨体をゆるやかに流して、室の中のリキへ近寄った。
「わっ…」
リキのそばに座っていた水夫たちは、ぬっと入ってきた巨大な竜の頭に驚いて腰を浮かせたが、悲鳴をあげて逃げ出すような者がなかったのはさすがというべきだったかもしれない。
（起きよ）
リキの体がふわりと宙に浮き、すうっと海竜の目前まで移動した。
（起きるのだ。あの子供が京へ行ったぞ）
「う…」
苦痛の声を洩らして、男はうっすらと目をあけた。
「リキさま！」
「リキ！」
驚きに声をあげる人々の前を、竜王が外に出るのに導かれるように、リキの身体も宙を流れた。
ゆっくりと開かれた彼の目に映ったのは、垂れこめた黒雲が方々に散り行く空だった。
（リキとやら、あの子供を助けたいか？）
「カイ…！」
誰かの声に、男は反射的に頷いた。ふと、訝って視線を転じたとき、痛みも忘れて唖然とした。
（…その傷では剣も持てまい）
海竜の目が輝きを増したような気がした。
あっと思ったときにはリキの傷は完全にふさがれていた。
「こ、これは…」
宙に浮いたまま上体を起こし、傷のあったところを触ってみる。あんなに深かった傷はきれいに癒え、痛みが無くなっていた。リキは

問いかけるように海竜を見つめた。
（……。我の力は善にも悪にも染まりうる。我らは”界”に属するものゆえ）
海竜が呟き、そして、男が寝ていたそばに置いてあった鏡と、リキを傷つけた長剣をついと浮かせて男の前に並べてやった。
（子供を追うぞ。我の背に乗るがいい）
海竜の言葉に、男は一瞬躊躇したが、腹を決めるとひらりと海竜に飛び乗った。それへ姫巫女が呼びかけた。
「わたくしも及ばずながらお手伝いいたします！」
「リキ、気をつけろよ！」
「ここはまかせておけ。カイ坊を連れて帰れよ！」
水夫達は室の縁に立ち、手を振った。
「よろしく頼む」
リキが頷き、海竜はふわりと高く舞い上がった。
人々の口から感嘆の声があがる。

鱗の輝くこと、目を開いていられぬほどに眩しく、その背に乗った男は、まるで天より降り来る戦神のようであった。
――後に、少女巫女が年経たとき、そう昔語る。

「何たることだ…」
伊都岐嶋を一旦離れた妖術師は、依然、カイのからだをのっとったまま、海岸の洞窟に身を潜ませていた。海を越えるまではなんとか飛べたが、それが限界だった。
相変わらず封印を突き破りかねない勢いで、カイは暴れている。
「えい、騒々しい！」
忌々しげに呟くと、口中で呪を唱え、印を切った。途端に、少年の魂が静かになった。

なぜ海竜に跳ね飛ばされたのか。何より、なぜ”？煌”の名を唱えても竜は反応しなかったのか…。あの名は、彼の本当の名であるはずだった。何かのきっかけで海竜が神力を取り戻したのか、あるいは自分の力が衰えたのか。
「…どのみち急がねばわしも持つまい…」
ぎりりと歯を軋らせ、妖術師は考え込んだ。

一方、大伯郷の秦氏の屋敷では一騒動起きていた。
カイの笛を所望していたときでもある。それが、伊都岐嶋にて妖術師に操られ、竜神に乗って京を襲うというのだ。
秦氏も、京へ通達するか否かかなり迷っていた。この世に竜神などがいるのか、妖術師とはいかなる者なのか。
阿伽具のほうも秦氏のほうも、あまりの情報の少なさにイライラとしていたころ、海の民から不気味な話が流れてきたのである。
それは、まさしく一瞬のうちに白骨化してしまうというあれであった。
「うぬう！　まったくあっちこっちからわけのわからぬことばかりを言ってきおって！　だれぞ、阿伽具を呼べ！」

秦氏の前に、ずしりとした重厚な老人が静かに座していた。彼にとってこの海の民の棟梁は決して敵に回してはいけない存在だった。この老人がその手を南へさせば、この大伯、牛窓近辺の海の男たちがそれにならうことはよく承知している。ひょっとすれば、吉備、伊予、果ては半島まで、その号令は轟き渡るかもしれない。
――その、海の民が味方におればこそ、秦氏も繁栄できるのであると言っても過言ではなかっただろう。
「阿伽具よ、して、結局はどうなのだ？」
どうなのだ、とは阿伽具のほうこそ聞きたいことであった。
「…秦様のおっしゃるその妖物、ひょっとしたら、同じ物かもしれ

ませぬ。報告を受けた限りでは、ここ最近、漁に出た者が妖物により一瞬にして骨の砂にされ、また、同じ児嶋でわたしの息子の船に乗る水夫もその犠牲になったと…。その妖物ははじめ竜神に憑いていたそうですが、カイに憑いてから再び竜神を制しようと考えたのかもしれませぬ。…当の妖術師が息子にそう申したと…」
秦氏の当主はじめ家人たちは呆然と聞いていたが、恐ろしいことに思い当たり、蒼白になった。
「そ…それで、今はどうなっておるのだ？　まさか、もう京にいっているというのではなかろうな…？」
「さ…そこまでは。息子がいれば何らかのかたちで報告が入ったでしょうが、今はその妖術師に一刀を受け、意識をとりもどさぬとのこと」
老人のあまりにも淡々とした物言いに、当主はくらりとした。この老人の恐ろしいところは必要とあればどこまでも非情になれることであった。
秦氏は京におわす帝に状をしたため、急ぎ家人に使いに立たせた。しかし、その眉一つ動かさずに報告をする阿伽具の心中で、致命傷を負った息子と、孫のようにかわいがっている少年の身の上を案ずる祈りがなされていたことに気づく者は、誰もいなかった。

AWATSU－5－

※※※玖

瀬戸が一望できた。
海竜王はゆるやかに宙空に浮かび、眼下の人々が行き交う様をみている。
また、深い青の海が陽光に照らされてきらきらと輝いていた。無数の小さな島が点在しており、漁をする船があちこちに見える。
「一体カイはどこへ…」
焦りに苛立つ男を竜王がたしなめる。
（落ちつくがよい。今、伊都岐嶋の巫女が探っておる。しかし、あやつ、京を制してどうしようというのか…）
「…さあ…。殿上人がどうなろうと私は知ったことではないが、カイだけは京へ入れるわけにはいかないのです」
（ほう？　何故に？　そういえば、術師はあの子供を粟津王と呼んでいたが、”カイ”　とは通り名か？）
「ええ。あの子の身分を隠すために、私がカイと名づけたのです。カイは京の皇族の血をひく子供なのです。父君は政権争いによって無実の罪を着せられ自害させられました」
（なるほど…。我の記憶にあるのは確か、あのあたりで五人の王が覇権を争うておった頃じゃが…人間の世の流れは目まぐるしいことだの）
竜王の言う五人の王のことは、いつの頃のことなのかリキにはよくわからなかった。
はるか昔から、この島国もあちこちで小さな国がおこり、覇権を争って戦をしていたのだろう。

竜王はリキの思案を知らぬげに続けた。
（あれは天晴れな魂を持つ子供じゃ。あのような輩にいつまでも操られておりはせぬじゃろうが急いだほうがよかろう）
「――ええ」
断固としたリキの言葉に、竜王はふと思いついたことを尋ねてみた。
（おぬしをここへ戻したは誰ぞ？）
「粟津王の父君であらせられる大津皇子様です」
（父御か…。む！　巫女があれを見つけたようじゃ）
竜の首が翻り、雲間にうねった。

妖術師は馬を駆って京に疾走していた。
海路をとるわけにもゆかず、飛ぶわけにもいかず身を隠して行くには山中を行くしかなかった。
「走れぇ！　走れぇ！　もっと速く！」
血走った両目には狂気の光。がむしゃらに鞭打たれて馬は半狂乱の勢いで山道を疾駆していた。
ごうっ！
突然、風が轟音とともに上空を駆けた。
術師の目が海竜の影をとらえ、思わず舌打ちした。思ったより追撃が早かった。伊都岐嶋の姫巫女に尾鰭を返され、また神力を取り戻した海竜は今度こそ術師を許しはしないだろう。
竜の影におびえて馬は山道を反れ、滅茶苦茶に逃げ始めた。
「ちっ！」
カイに憑依した妖術師は舌打ちして暴れる馬から飛び降りると、木々を縫うように走りはじめた。
「ぜぇ…ぜぇ…」
右へ左へと走る術師の前に、ひょうっと空から舞い降りた人影があった。
「むっ！」

術師の足が止まる。胸に鏡を掛け、手には長剣を持った男を見、術師は多少驚きの声を洩らした。
「ほほう。おぬし、わしが切った男ではないか…。あの傷がふさいでいるとはのう。竜が治したのか」
少年の口が大きく左右に吊り上る。
それを痛ましげに見つめたリキが静かに口を開いた。
「妖術師、その子から離れろ」
ゆっくりと長剣の刀身が持ちあがっていく。
「ほっ。こやつを切るか？　おぬしに養い子である粟津王を切れるかな？」
「切れるとも。――無論、その方が死ねば、私も生きてはおらん」
「――――」
冷たく底光りする目で自分を見据える青年を見、忌々しげに口をつぐんだ術師だったが、またもにんまりと笑った。
「ぬし、忘れておるかもしれぬが、あの竜はもはやわしのものぞ。いくらここまで来たとはいえ、わしが竜の名を唱えればぬしの身などひとたまりもないぞ！」
術師は勝ち誇ったように叫び、印を結んだ。
「…竜王よ、どうなのです？」
恩があるとはいえ、こんなところで竜に襲われたのではたまったものではない。
眉をひそめてリキが振り返ったとき、そこには海竜ではなく帷子を着た輝くばかりの麗人が立っていた。
目をまるくした男に麗人がくすりと笑い、
「試してみればよい」
術師のほうを見やった。
指を組み印を結んで梵語の呪文を唱えている術師の周りに風が立ち巻き、髪をなびかせていた。そして、妖気の高まりとともに、術師は竜の名を唱えて麗人に向け縛の術を放った。
「竜王！」

リキは思わず叫んだ。
しかし。
麗人は微笑を浮かべたまま、髪の毛一筋さえも乱されることなく立っていた。
「なっ…なぜじゃ！　なぜ効かぬ…っ！」
全魂の呪を、またも跳ね返された術師は恐慌をきたし、再び試みようと荒々しく印を結んだ。
「無駄じゃ、術師。やめよ。我が名はすでに輝煌ではない。そなたの術はもはや効かぬ。ついでに言っておくが、仮に我が名をそなたが唱えたとしても、もう我には効かぬよ。我に名を与えた者は、名と共に「鍵」を与えたのじゃからな」
心底楽しげに、くつくつと笑った麗人は、リキに言った。
「ま、というわけじゃ。安心して子供の名を呼んでやるがよい」
名…。
カイの本当の名は粟津王だ。
自分がつけた「カイ」というのは素性を隠すための方便でしかない。
大津皇子があれの好きな名を呼んでやってくれと言った。その名とは…。
リキは凝然と立ち尽くした。
ふと、昔の記憶が蘇る。

少年が7つになった日、彼は少年の本当の名を教えた。
カイは一瞬ポカンと口をあけていたが、
「俺の名前はカイだっ！」
告げたリキの方がびっくりするほど大きな声で叫ぶと、文机をひっくり返して室を飛び出した。
その後、大きな桜に登って拗ねている少年を見つけたリキは桜の下から声をかけた。
「粟津王とは、貴方の父君が貴方に下さった名です。それを無下になさってはいけません。…ですが、貴方がカイと呼ばれるほうがよ

いのなら、今までどおりカイと呼びましょう」
そっぽを向いていた少年が口をへの字に曲げて振り返り、
「うん。カイがいい」
こくりとうなずいた。

困惑に固まっていたリキの相貌がふっと緩む。逡巡はあとかたもなく消えていた。
リキは力強く養い子の名を呼んだ。
「カイ！」
ほぼ同時に、
「くそっ…！」
術師は反転し、駆けだそうとした。しかし、男が少年の名を呼んだ途端、体は凍りついたようにピクリとも動かせなくなった。男の声は山の空気を揺るがすほどに強く、術師の耳を鋭く打った。
「ぬ…ぬ…」
「カイ！　起きなさい！　いつまでも妖術を甘受すべきではない！」
身体の奥底にいる少年自身が身じろぎした。

――カイ！　――

少年は暗い空間でたゆたいながら、うっすらと目を開けた。
懐かしい声が自分を叱っている…。
（リキの声だ…）
カイはぼんやりと考えた。
（ぬ！　させるか！）
かたや、妖術師はカイを再び眠らせようと呪文を唱え始める。
再び、カイはうつらうつらと眠りに落ちかかりはじめた。
ピーチチチ！
木々の間から甲高い声をあげて鳥が飛び立った。
目の前、硬直したまま反応を示さない少年に、業を煮やしたように

男が怒鳴った。
「起きろカイ！　置いて行くぞ！」
（――っ！　待ってリキ！　俺も行く！）
少年は思いっきり跳ね起きた。

ぱあん！

何かがはじけるような音。あふれてくる光。そんなものが一斉に少年をとりまいた。
「むん！」
リキの気合とともに、長剣がうなる。
ギャアッ！
獣のような声とともに、黒い影が上空へ飛んだ。
（急げ！　あやつの本体を突き止めねばならぬ！）
いつの間にやら竜身に戻った竜王の背に、リキは目覚めたばかりで混乱気味の少年をかつぎあげ、自分の前に降ろしてやる。一気に上昇した竜王は京へ向う妖術師の影を追った。
「リキ！　傷は…っ」
「竜王に治していただいたのです。今はそれよりあれを…」
リキは悔恨に顔を歪ませる少年にほほえみ、謝ろうとするのを止めると長剣を渡してやった。そして胸に掛けた鏡をはずそうとしが、その手を少年が押しとどめた。
「――それはリキが持ってて」
「しかし…」
「…その鏡はね、姫巫女と繋がってるんだ」
にっこりと、少年が笑った。

上空に舞い上がり、ほどなくして竜王は妖術師の黒い影を見つけた。

それめがけて青白い炎を吐きつける。非常な勢いで妖術師の影に襲いかかった火炎は、その右半分に纏わりついた。のたうち、もがきながら、それは次第に速度をあげ京にむかった。
　と、いきなり山が切れた。
眼下に広がるのは京の都――藤原京である。
カイの父である大津皇子がいたのは飛鳥の浄御原であった。しかし大津皇子の死後、８年目にしてその都は捨てられた。
今、藤原京は夕焼けに赤く染まり、大路には人通りもなくなっている。
リキはあの日の事を思い出さずにはいられなかった。大津皇子より粟津王を預かった日の事を…。

　青白い炎とそれを追う長大な影は、京を警護する舎人などに発見された。
飛鳥山のほうへ飛んでいくのを呆然と見送った人々は、我にかえると慌てて報告に走った。だが、報告を受けた舎人の束は夕暮れ時でもあり見間違いであろうと取り上げもしなかったが、次から次へと似たような報告が入ってきたため、政の主だった面々に報告せぬわけにはいかなくなったのであった。
　そんな折も折、吉備の秦氏の急使が帝へ謁見を願い出たのである。さらに追い討ちをかけるように、大路を駆けてくる舎人が叫んだ。
「竜が…っ！　竜が飛鳥山に降りたぞ！」
「何だとっ！？」

「妖術師に操られた竜だと？　あほらしい」
太政大臣・藤原不比等は苦々しい面持ちで吐き捨て、秦氏の急使が持ってきた書状をポイと放った。
しかし、だ。
これが万一真実であり、帝を狙った者の仕業であるのなら放ってお

くわけにはいかなかった。その妖術師とはいかなる者か、またそれを糸引く者がいるのかどうか確かめておかねばならない。
「飛鳥山に兵を出せ。何者か確かめて参れ」
それから彼は陰陽頭を呼んだ。

陰陽五行は天武帝により盛んになり、陰陽寮は国家機関として重要な役割を持っていた。
天武帝は式神を用い、天文や遁甲をよくしたという。同時に、陰陽五行がひろがることによって我が身にかかる反乱も危惧し、厳しい抑制を加えた。
この時代、陰陽寮はもっぱら天文、暦、そして占術だけにとどまっていた。祓いや祈祷といったものは密教僧侶や神祇官の職分だったのである。

「お呼びでございますか」
しばらくして、陰陽頭が静かに入ってきた。
「うむ。妖術師が竜を操って飛鳥山に降りたそうだが」
「はて。あれには妖の者は憑いておりませなんだが…？」
「む？」
「わたくしが視ましたのは妖の者を追う竜と、それに乗っているヒトでございました」
二人はしばし顔を見合わせた。
訝しげに不比等は考え込む。陰陽頭は低く呟くように言った。
「わたくしが視たところでは、政に大事あるようなことにはなりますまい。しかし、波紋は広がりましょう。そして、いまひとつ…」
「――？」
陰陽頭はいっそう声を低め、不比等に囁いた。
「……帝の火が消えかかっております」
「――――！」
闇夜が京の都を包み込んでいた。

※※※拾

一方。

飛鳥山に降り立ったカイ、リキ、海竜王は妖術師を追って林の中へと入っていった。

日はとっぷりと暮れ、闇に包まれていた。月光が生い茂る木々の間から山肌に白い光を落す。その光を頼りに林の中を縫うようにして進む。

先頭に立つ竜王は人の姿に形を変えていた。虹色に輝く帷子を着、その貌は白く美しく、そして高貴であった。

カイなどはしばらくぼけっと見惚れたくらいである。

この闇夜でも、麗人の身体から発する青白い燐光でぼんやりと明るく見え、月光が落ちかかれば溜息が出るほどに美しく輝いた。

「――ふむ。あちらか」

竜王は足を止め、右前方へ視線を動かした。

しばらく歩くと林が開けた。

狭い空間に朽ちかけた草庵が黒くうずくまるようにぽつんと建っているのが見えた。

周囲は嫌な匂いが漂い、瘴気が沈殿しているように感じられた。

「生ける者の気配がない…」

かれの呟きに、カイとリキは眉をひそめる。

「…あいつ…体何なんだろう？」
「――？」
「自分の名もとうに忘れて、術を得たときには何十年か何百年かたってて…。何のために、そうまでして術が欲しかったんだろう…？」
カイの呟きを耳にしつつ、竜王はスタスタと草庵へと近づいていく。
二人がそれに続いた。
「まったく、何という臭さだ」
秀麗な相貌を不愉快そうにゆがめて毒づき、戸を蹴飛ばした。なかから更に濃厚な瘴気と異臭が流れ出た。
少年は思わず鼻をつまんで顔をしかめたが、興味津々に竜王の背後から中をのぞきこんだ。
「これ、危ない」
慌ててリキが少年の襟首をつかんで引き離す。
まっくらな小屋の中ほど、何かがうずくまっていた。
「――木乃伊ではないか。妖術師。木乃伊らしく黙っていないで礼など言ってはどうじゃ。わざわざ来てやったのじゃから」
竜神らしい高慢さで、彼は美しいおもてに皮肉げな笑みを浮かべた。
「くっ…けっけけけ…」
闇の中から怪鳥のような声が洩れる。ゆらり、とそれが動いた。
「ガーッ！」
突然、獣のような声を発し、小屋の戸口にぶち当たりながら飛んできた。
「わっ！」
少年が慌てて身をよじる。
月光のもとに現れたそれは、干からびた全身に反して異様に光る目と、がちがちと噛み鳴らされる歯がいっそう化け物らしく見せた。
木乃伊は再び奇声を発して襲い掛かってきた。
「坊、切れ！」
竜王がよけざま叫ぶ。
反射的に長剣を逆袈裟に切り上げた。

ざん、という鈍い音と、意に反して棒きれを叩き切るようなあっけない感触。
ばさりと木乃伊の半身が地に落ちた。すかさず竜王がそれに火を放つ。破裂を繰り返し青白い炎が木乃伊を砂に変えた。
頭と体半分が残った木乃伊は、しかし半身を失ったことに何の興味も抱いていないようであった。カラカラと笑いながら宙にぷかぷか浮いている。
「ホーホッホホ…わしはここじゃぞ」
木乃伊がちぎれた体を闇の宙に浮かばせて笑っているさまは、あまり見ていて楽しいものではない。
リキもその異様さに眉を寄せている。
「お前、一体なんなんだ？」
カイが剣を構えつつ木乃伊に問うた。
「何、とは？　わしはわしじゃ」
カイの問を引き継ぎ、リキが静かに問い返す。
「木乃伊となる前の名はなんと言う？　それだけの胆力と術を持っているほどのおぬしだ。生身の体があるときは朝廷への出入りもしたであろうが。――天武帝は天文と遁甲をよくされたときく。おぬし、大陸から来た方術師ではないのか」
「――そうであったかもしれん。……ふうん…一介の船乗りが方術を知っておるとはの。奇異なことじゃの。だれぞに習うたのか？」
「いや。あれは習うことは僧も禁じられている。ただ俺は知っているだけだ」
「――――」
木乃伊は訝しげに黙りこんだ。
竜王の相貌には面白そうな表情が浮かんでいる。少年には何のことやらさっぱりわからなかったが、昔、リキに三才のことは教わった。
【天道、地理、人心を掌握した上で、時期を読んで行動し、勢いに乗って発動すること云々】
兵法のことだったように思う。

（なんでリキがそんなこと知ってんだろう…？）
少年はふと疑問に思った。改めて養父であり、兄であり、師であり、友である男をまじまじと見つめた。
その少年の心中を読んだかのように、竜王が楽しげに口をはさんだ。
「坊よ、今はそれどころではないぞ。木乃伊がそなたを狙っておるぞ」
言った矢先に木乃伊が不気味な顔を突き出しながら少年に向かって飛んできた。
「うわあっ！」
慌ててよけつつ、カイは麗人に抗議した。
「竜神！　面白がってないでコレ何とかしてよ！」
竜王は楽しげに笑っただけだった。
「方術には方術で対するしかないんだが…」
「だーっ！　リキまでのんびりしてんなよ！」
カイは癇癪を起こしつつ、再び飛んできた木乃伊をよけざま薙ぎ払う。
ばさりという音と共に青白い炎が包んで砂に変えた。
木乃伊の首が笑いながら浮かんでいる。
「ちっ」
竜王と少年が同時に舌打ちした。そのとき、
「おい、そこに誰かいるか！？」
誰何するだみ声が林から聞こえた。
「！」
「がーっ！」
木乃伊の首が、獲物を見つけた獣のように奇声を発し、歯をガチガチ鳴らして兵士に向って飛びかかった。
「う、うわーっ！」
この世のものとは思われぬ”首”を見た兵士は叫んだまま居竦んでしまった。
血肉まで食らい尽くしそうな首の声は、しかし、兵士の断末魔に消

されることはなかった。
「えやあっ！」
元気のよい少年の気合とともに長剣がうなりをあげて木乃伊の首を真っ二つに叩き切った。
「げぽっ」
首が一瞬ピタリと静止する。
竜王の青い目が光を放つ。分離する瞬間、首は青白い炎に包まれ、燃え上がった。
「やたっ！」
少年は歓喜の声をあげた。しかし、
「まだじゃ、坊」
竜王が静かに言い、雅な姿を兵士たちの前に現した。
「……」
不気味な瘴気の漂う闇の中から現れた、青白く燐光を放つ麗人の姿を、兵士たちはしばし陶然と見つめた。
「兵士ども、よく聞くがよい。方術師の肉体は消滅したが魂は飛んでいったぞ。そなたらの主を喰われたくなければ引き返したがよい」
玲瓏たる声音には逆らいがたい威厳が漂う。
光を放つ麗人を、兵士らは”神”と悟った。
「はっ…ははーっ」
兵たちは深々とひれ伏し、大慌てでとって返す。それを見送って少年は木乃伊の燃えつきた砂に目を落とした。
「――都っていうのは、体がこんなになるまで憎しみとかそういものが生まれるとこなのか…？」
「カイ……」
「坊よ。それは人間それぞれじゃ。坊の父御のようにきら星のごとく輝き、したがために消されてしまった人間でも、この世の栄達などというものは、泡のような儚げなものであるということを悟ったものであれば未練もなにも残るまいよ。あのように怨霊となるはこの世の権力の確かを信じすぎ、己を過信しすぎたためじゃ。なるも

のはなるようにしかならぬ。己の不心得でなったことは結果として変えようもない。そこからどう己が生を切り開いていくのかは己が心ひとつじゃ」
竜王はふと苦笑をもらし、
「…心のどこかでそうであると解ってはいても、頑是無い子供のように己を取り巻くものに逆恨みをする…」
その白い手がカイの頭におかれた。
「坊はこの都で暮らしたかったか？」
「ううん。父上が俺をリキに預けてくれたからこそ、俺は船にも乗れるし、リキと一緒にいられる。それにさ、竜神とも友達になれた。大伯の郷にはおじじもいる」
「――」
微笑した竜王の顔を見上げ、少年はふと思いついたことを尋ねた。
「そういえば、竜神はどうして術師の術が効かなくなったの？尾鰭を返したから？」
「操られていた我の尾鰭を切ったのがそなたであろうに」
不思議そうに見つめる少年とリキを眺めて竜王は楽しげに笑った。
「体の一部が戻ってきたからとて、そなたが我に名を与えねばあのまま操られておったであろうよ。確かに、あれがないと飛ぶのに困るのだがな」
面白そうにカイを見やる竜王の言葉を反芻していた少年は愕然とする。
「名…？　っ！　えっ！　お、俺が？　いつっ？？？」
カイにはまったくそんな覚えはなかった。竜王はひとつ答えをくれた。
「そなた、我から落ちたとき、我を見て何と言うたか覚えておるか？」
「――」
父の笛が海に落ちたときだ。
方術師が少しの間自分から離れていたとき、迫る白銀の竜の怒りに

燃えるあの目。――なんて綺麗な青だろう――。
「海のようだって…俺の名前も海だから、同じだって思ったんだよ」
――それが何故竜神の名になるのか解らない。
竜王はくすりと笑うと誇らしく言ったものだ。
「そのとうりじゃ。我が名は”カイ”。それともうひとつ。我が魂は”音”だけでは縛せぬぞ。――ま、それは秘密にしておこう。ともあれ、海の王にふさわしい名じゃろう？」
片目をつぶってみせた竜王に、少年はそれはそれは嬉しそうな笑顔を向けたのだった。

※※※拾壱

「神だとっ！？」
不比等は叫んだまま絶句した。
「だあーっ！　どいつもこいつも！　神だの竜だのと絵空事をほざきおって！」
不比等は首の後ろをガリガリ引っ掻きまわした。
すでに神祇官や僧侶には妖術師を封じる用意をさせている。
陰陽寮ではこの異変を占い、あわせて星の動きも追っているはずだった。

大内裏では警護する兵士を増やし、神祇官・僧侶らがそれぞれ調伏の儀式を始めた。その様子を、帝・左右大臣らが見守っている。真言や祭文が厳かに響く中、控えていた女官がいきなり床に突っ伏した。
「これ、どうなさいました？」
「しっかりなさりませ」
他の女官たちが助け起こそうと抱きかかえた。
「ガーッ！」
「きゃああっ！」
悲鳴が響き渡り、高官、兵士らは一様にビクリとした。
「何事だ！？」
「もしや例の…」
「帝をお護りしろ！」
一変。女官達の悲鳴は一層たかくなり、列席していた高官たちも腰を浮かせた。
ばたばたと兵らが走り回って騒然となった中でも、僧等は祈りをやめず、ますますその響きに熱がこもってきていた。帝や高官たちを護るように立ち並んだ兵士らは、剣・弓をつがえ身構える。
「ひゅううぅ…ひゅううぅ」
血まみれの女が内裏の中から現れた。その口には女のものとおぼしき手首が咥えられていた。
「うぬ！　出たな！」
儀式を取り仕切っていた僧正が何者かにとり憑かれた女と対峙する。僧と神祇官たちの祈りの声が激しく空気を震わせていた。
「うるるる…」
女の喉が獣のような唸り声を発し、血走った目をぎょろりと動かして御簾の向こうの帝を見据えた。
「――――っ！」
帝はビクリと体を震わせ、うわずった声で僧に命じる。
「な、何をしておる…は、は、早ようあれを消さぬか…！」

「ははっ」
兵士たちが僧正を援護するように女を取り囲む。ぼとりと手首を落とした女は、しわがれた声で歌を紡ぐように言った。
「我が恨み…思い知れ殿上人どもよ…こは我が恨みぞ…」
「恨みとは何だ。聞いてやる」
「我が…恨み…」
女の目から血の涙が流れた。
僧と神祇官たちの祈りが女にとり憑いた妖術師をじわじわと締め付けている。しかし、女から妖術師を切り離さぬことには、女を切ったとて妖術師を取り逃がしてしまうだけだろう。
僧正が言葉を継ごうとしたとき、ふいに頭上から子供の声がふってきた。
「そいつに理由を聞いたって無駄だよ、おじさん」
僧は上を見上げ、ぎょっとした。
いつのまにか、白銀の巨大な竜が、まるで人々の視界を埋めてしまうほどに近く浮上していたのだ。その竜に当然のように乗っている子供と静かに控えている赤銅の肌をした長身の男が人々を見下ろしていた。
「なっ…なんと…！」
「お…大津皇子が…っ！」
左右大臣の搾り出すようなしわがれた声が内心の驚愕と恐怖を如実にあらわしていた。
不比等さえもぎょっとして、食い入るように少年を見つめた。
「何と?！　今、なんと申した！」
帝はビクリと体を震わせ、御簾に手をかけた。傍にいた女官が慌ててそれを押し止める。
「み…帝！　お待ちくださりませ！」
「放せ！　聞こえたぞ！　大津と申したな！　…ええい、放さぬか！」
御簾から出ようとする帝とそれを抑えようとする女官たちがもみあ

っているうちに、吹き込んだ風に御簾がふわりとなびいた。
帝の目に、竜に乗った少年の姿が飛び込んできた。
その相貌――幼き日、亡き父と共にまみえた凛々しい青年の相貌が鮮やかに蘇る。そして、彼の突然の死がどういったものであったのかは……ひとの口には戸は立てられぬものだ。それを知ってしまった時から、今上帝の中には、その不遇の皇子に対する負い目があったのかもしれなかった。
「お…大津…ひ…あああああ」
腰を抜かした帝は、ガタガタと震えだし頭を抱え込んで突っ伏した。
（何ということだ…！）
凛とした面と、すっと通った鼻筋。涼しげな目元…なにより、光り輝くようなあの目は、人々と父王の期待を一身に受けていた、――いたがために鵜野皇后と不比等が謀り自害に追い込んだ大津皇子に見間違いようがなかった。
さすがの不比等も背中に氷のような冷や汗が伝い落ちるのを痛いほど感じた。左右大臣に至っては顎が外れんばかりに口をあけ、蒼白な顔に脂汗をたらしながら腰を抜かしている。
その、人々の驚愕と恐怖など知らぬげに、少年は父とよく似た声で続けた。
「そいつはね、大陸から渡ってきた方術師だよ。名前も恨みの理由もとうに忘れ果ててるんだ」
にっこり。
この笑顔ほど、更に人々を恐怖のどん底に突き落としたものはなかったろう。少年はすっくと立ち上がる。
後ろにいた青年が、胸にかかっていた鏡を少年の首にかけてやった。長剣を持ったまま、海竜から飛び降りた少年は、帝・両大臣たちの前にその姿をさらした。
リキは油断なく目を走らせ、いつなりとも飛び出せるように構えていた。
「あな…貴方さまは…」

僧正がからからになった喉を上下させて呟いた。少年がにこりと笑い、いくぶん言葉遣いを改めた。
「――父をご存知か」
一言呟いたあと、女のほうにスタスタと歩いていった。
「…いいかげん他人につくのはやめろ、方術師。お前の恨みを受け止めてくれる奴なんてもうこの世にはいないんだから」
カイは低く静かに言い、長剣を構えた。
「うぬっ…どこまでも邪魔しおって…」
血まみれの歯をむきだして唸る。カイはじりじりと間合いを詰めていった。
呆然としていた僧等は我に返ると再び真言を唱え始める。
「ううう…ぐるるっ…忌々しいっ…」
バリバリと耳を掻きむしる。鮮血がふき出した。
方術師は呪言を振り切るようにひょうっと飛び上がると神祇官の一人に襲い掛かった。
「うわあっ！」
カイの長剣がぶんと鳴って、剣の腹がしたたか女の背中を打った。
「ぎゃっ！」
「押さえ込め！」
僧正の号令で僧や神祇官、兵士らが束になって女を抑えにかかる。歯を剥き出し、唸り声をあげて暴れる女に向って、僧正は印を結び真言を唱えはじめる。その手がさまざまな印を形作っていく。
「ぐおおお……」
不気味な声があがり、ゆらゆらと黒い影が女の体からせり上がってくる。少年は長剣を構えたままその様子をじっと見ていた。
ゆらり、ゆらりと黒い影が浮かび上がり、僧正の祈りにのたうちまわる。皆が固唾を飲んでこの光景に見入っていた。
現れた影はすでに人とは呼べぬ奇怪なモノだった。
（坊、それを切れ！）
海竜が告げた。

少年は頷くと、持つ剣に破魔の気をこめ、大きく振りかぶった。
「えいっ！」
断末魔の声が響き渡り、両断された影がボッと音立てて燃え上がった。
（おのれ…おのれぇぇぇ！）
青白い炎の中でのたうっていた影は燃え尽きる寸前、そのひとかけらを炎から脱出させた。
それは真っ直ぐ少年へと飛んだ。
「カイ！」
「――っ！」
胸の前できらりと光った鏡に黒い影がぶつかり、澄んだ音をたてて割れてしまった。
鏡の破片が炎に反射してきらきらと光りながら地へ落ちていく。
「――」
妖術師の影も気配も消滅していた。憑かれていた女がばったりと倒れこんでいる。
「お…終ったのか…」
誰かの呟きが、その場に安堵の息を誘い、やがてわっと湧き上がった。高官たちもホッと胸を撫で下ろした。
しかし。
重大なことに気づくのに、たいした時間はかからなかった。
少年は真っ直ぐ立ったまま、帝がいる御簾をじっと見つめていた。
人々の安堵もつかの間、異様な空気がぴんと張り詰める。
ことに不比等、左右大臣以下の高官たちは脂汗を浮かべながらピクリとも動けなかった。
少年の目に一瞬、殺気がこめられたのを誰が気付かなかっただろう。
だが、誰もその場から指一本さえも動かせなかったのだ。
誰もがこの少年が帝に襲い掛かることを信じて疑わなかった。
が、大津皇子にそっくりの面に不適な笑顔を浮かべた少年はくるりと向きをかえた。

地面すれすれにまで身を低めた白銀の竜の首に腕をまわして、頬を鬣にうずめた少年はそっと呟いた。
「…大丈夫…恨みに飲まれたりしない…」
そして、少年はまた竜の上に飛び乗った。
白銀の竜がゆっくりと上昇しはじめる。
我に返った不比等は思わず声を発していた。
「名を聞いておこう」
少年が不比等をまっすぐ見据えた。
そのまなざしに知らず不比等はぞくりとする。少年はしばしの沈黙の後、応えた。
「――。粟津王」
聞いて、人々はさらに恐怖で身体を締め上げられた。あの日、行方不明になった大津皇子の皇子の名前…。
やはり生きていたのだ。
「――」
不比等は淡く笑って頷いただけだった。御簾の奥の文武帝は青ざめ、がたがたと震えつつしきりに脂汗を拭っていた。
白く輝く竜に乗った少年がゆっくりと上空に消えていく。
さながら天上の皇子のように……。

※

海竜はゆっくりと雲の上を進んでいた。
まだ夜は明けず、月が煌煌と空を青く照らしていた。
少々くたびれたらしい少年は、養父にもたれてうつらうつらしていた。
「…リキ…」
「え？」

「あいつ、本当に消えたのかな…？」
改めて少年を見つめた。海竜の釈然としない態度も気になっていたところだ。
「…あいつ…鏡の中に入っていった。どこへ行ったんだろう……？」
少年はそのまま眠りの中に落ちてしまった。
「竜王…」
リキの眉間にしわが寄る。ある一つの可能性に思い当たったのだ。
応えた竜王の声音にも深い憂いが含まれていた。
（うむ…。あやつの気配が、まだ残っておるのだ…。瀬戸にな）
「――――っ！」

AWATSU－6－

※※※拾弐

祭壇の神鏡がパン！　と音をたてて割れ飛んだ。
「きゃっ！」
姫巫女は声をあげて倒れた。
神鏡から黒い塊が飛び出してきて、庵の中をぶんぶん飛び回っている。
「……何という怨念…」
姫巫女は蒼ざめ、背筋が凍えるほどの恐怖を感じた。
「姫巫女さま？　どうなさいましたか？」
戸の向こうで少女巫女が心配げに声をかけた。ハッとして彼女は叫ぶ。
「開けてはなりませぬ！」
「えっ？」
厳しい声に少女は立ち竦んだ。
「決して開けてはなりませぬ。リキさまが戻られるまでは…」
唇を噛み締めて姫巫女は起き上がった。
この弥山の力を借りて、怨霊を鎮めねばならぬ。
これを切るにはどうしてもカイの破魔の剣が必要だった。だが、あれは竜王の首に巻きつく妖術師を切ったときに海の底に沈んでしまっている。誰かに取りに行かせるにしても時間がない。そして、あの剣があったとしても、彼女には振るう術がない。
どちらにしても姫巫女には、彼らが戻るまでなんとか妖術師を押さえ込むことしかできそうもなかった。
姫巫女は祭壇の前に座り、祈りはじめた。

祈りの中に入っていくのは奇妙な感覚である。
上も下も右も左も無くなって、”己”というものがまるで宙に浮いているような感覚なのだ。
これを突き抜けたとき己がもっと大きな宙のなかへ存在しているように感じる。
自我という存在が定かでなくなるような…否、そうではなく、もともと魂とはこういうものなのかもしれない。
善悪の業を抱えた”魂”は、しかし確かに存在しつつ、かつ宙に溶けつつ、人として生まれてはじめて形が得られるのだろう

海の泡のよう…消えない、泡…。
彼女は呟く。

ふと、同じ場所にぼんやりと存在するものに気づいた。
（どなたですか…？）
それはゆっくりと人の形に現れて、彼女の前に立った。そして、彼女に微笑んだ。
唐の衣のようだった。手に、何か札のような物を持っている。
（ああ…）
似たような能力を持つ人だとわかった。それも、かなり強い力を持った人のようだ。
ぼんやりとしていた輪郭が徐々にはっきりと見えてくる。
穏やかな目をした五十代の男だった。長身で鋼のような体躯をしている。
（貴方も祈りを…？）
（―――）
声をかけられ、男は穏やかな眼差しを彼女に向けると、ゆっくりと頷いた。しかし、その相貌には苦笑が浮かんでいた。
（祈っていたのか、祈っているのか、それとも違うのか、もう定か

ではなくなってきていますけどね…）
（……）
（ああ…故郷は遠い…。一度は戻り、妻や子供たちに会いたかった。
――ああ、あれです、私が乗ってきた船は…）
男の指差す方向に、海原を走る船が見えた。
（あれは…遣唐使船…？）
（否。新羅国の船です）
（新羅…。あなたは新羅の方なのですか、道士さま…？）
（…ああ…いかにも、私は道士でした。――倭国が隋に使者を送った、その使者が帰国する際、私もこの国へ来たのです）
（まあ…）
姫巫女は引っ掛かりを覚えたが、口には出さなかった。
（私は新羅の生まれではなく、隋で生まれました。あの船が倭に戻るときは、唐になっておりましたがね…。――煬帝を江都で暗殺したのは我らでした。戦・戦で国内が乱れに乱れ、反乱が起こり……人々はもう限界だったのです。我ら方術を使う者たちを、李淵は内密に暗殺集団として集めました。そして、反乱に紛れ込んで機を窺っていたのです。――しかし、李は実権を握った途端、我々までも内密に処刑しようとした…仲間のほとんどが殺されました。私は何とかそこから逃げ出し、妻と子供たちに一刻も早く逃げるよう伝えて、国を出て新羅まで流れ着き、あの船に水夫として紛れ込んだのです…）
（――――）
姫巫女は衝撃を受け、しばし目の前の男を見つめた。
では、この人は隋の時代、唐のはじめの人なのか…？
隋が滅亡したのは１００年ほども前のこと。
姫巫女には外国のことはよくわからなかったが、反乱を起こす李淵の暗殺集団として編成された方術師たちはおそらく、己の保身を図るため、口封じのために、逃れた者を除いて彼の仲間全員が闇から闇へと葬りさられたのだ。

（……）
いつの世も、いつの時代も同じ事を繰り返し、そのたびに犠牲者が生まれる。この男然り、大津皇子然り、粟津王然り…。
姫巫女の悲哀を察知したのか、男は申し訳なさそうに笑った。
（貴女のような若い女性にこんな血腥い話をしてしまうとは…申し訳ない）
（いいえ…。いつの世も、なぜこんな哀しいことが起きるのでしょう…）
（――――。人間の宿命でしょう…。頭でわかってはいても、それを抑えきれぬほどに、憎しみとは容易に消えるものではない…。己が誰かさえわからなくなるほどに――――――そうだ…憎しみだけがしこりとなって残るのだ、私のように…）
男の目から血の涙が流れ落ちた。
（あ、なたは……）
姫巫女の声がかすれた。

※※※拾参

竜王とともに戻ってきたカイとリキは、伊都岐嶋を包む異様な空気に顔を見合わせた。
弥山は地鳴りを起こし、呼応するかのように空に黒雲が立ち込め、稲妻が走っている。海は泡立ち、不気味な轟きが響き渡っていた。

「これは…何たることだ…」
人の形をとって降り立った竜王が、相貌をゆがめて呟いた。
「地鳴りが…」
「弥山が震えている」
姫巫女の庵の後ろにある弥山が、ぞっとするような音を響かせていた。

もともと、伊都岐嶋は弥山信仰の対象であった。海の神として祭られるのは中世初期である。奈良・平安の時代、この島は山の神として祭られていた。航海をするものも、漁をするものも神と祭られている山に対し、安全を祈ることはごく自然のことであったのだ。

その弥山が唸るように鳴っている。
「弥輪…！」
リキは小さく呟き、奥宮への道を見上げた。
「リキ、先に行っておれ。すぐ追いつく」
竜王の言に、一瞬の躊躇をみせたものの、
「……。カイを頼みます」
青ざめた顔で頷くと、鹿のように山道を駆け上がっていった。
「どうしたの、竜神？　俺たちも…」
竜王が低く呟くようにカイに聞いた。
「坊、あの青竜刀はどうした？」
「え？　あ、海の中だよ！　ほら、竜神の首についてた妖術師に投げつけてそのままだ」
カイの言葉に、「そうか」と頷いた竜王は、ついと身を翻すと海水に手を触れた。
「……？」
怪訝そうにその様子を見守っていたカイの目に、沖のほうから何かが近づいてくるのが見えた。
荒立つ波をものともせず、まっすぐに、飛ぶようにやってきたのは

数頭のイルカだった。
イルカは鼻先で青竜刀を押し上げると、竜王に差し出した。
「ご苦労。…しばし荒れようが、騒がず城でじっとしておれ。――じゃが、他所からの侵入者には気をつけよ」
竜王の言葉に、イルカが一斉に頭を垂れた。
カイがあっけにとられている間に、イルカたちは身を翻し、沖へと戻って行った。
「それ。持っておれ。使わねば、それにこしたことはないのじゃがな……さ、我等もゆくぞ」
剣を少年に押し付けて、さっさと歩き始めた竜王の背を見つめ、カイは錆もついていない青竜刀に目を落とす。
これが何を意味するのか、漠然とではあるが理解した。
姫巫女は――。

庵が黒い瘴気を立ち上らせていた。
「姫巫女!」
リキが叫んだ。土足のまま庵に飛び込み、まっすぐ祭壇のある堂へと走る。
一方、山道を駆け上がってきたカイと竜王は、宮の戸口で少女巫女が気を失って倒れているのを発見した。
「おい、しっかりしろ!」
少年は少女巫女に駆け寄って抱えおこしたが、瘴気にあてられたのか、苦しげに眉をよせたままぐったりとしていた。
「坊、その子供を離れた場所に寝かせてやるがよい」
竜王が指示し、少女を抱きかかえて庵を離れる少年を見送ってから、祭壇のある方を見やった。
その、ぴっちりと閉められた戸口の前で、リキが凝然と佇んでいた。
「…姫巫女…ご無事か…?」
低く声をかけてみるが、応えは無かった。男の面が蒼ざめてゆく。

開けたらどんな惨状が待っているのか、彼は心底恐ろしいと思った。
冷や汗が伝い、知らず体が震えている。
「リ…」
戻ってきた少年が男の名を飲み込んだ。そして、その蒼ざめた顔で
戸口を睨みつけるように震えながら立っている男に、まるで初めて
会ったかのような錯覚を覚えた。
いつも揺るぎなく、どんな危険なところへでも必要とあれば大胆に
踏み込んでいける男だった。恐れなど彼の心には存在しないのだと、
それがリキの全部だと思っていた。
しかし――。
今、少年の目の前にいる男は、戸一枚を開けられずに拳を握り締め、
唇を噛み締めて震える姿をさらけだしていた。
少年は、そして思い至る。
この戸の向こうにいるひとはリキが、たった一人愛した女性なのだ。
愛した人が無残な姿になっていたら…？　違う姿になっていたら…？
「……」
決めるのはリキだ。
少年は青竜刀を握り締めた。

永遠のように感じられた逡巡も、実際のところはほんの少しの間
だった。
リキは沈痛な面持ちで目をきつく閉じる。そして、次に目を開いた
時には決然として戸に手をかけ、堂に踏み込んだ。
ぶわっと覆い被さるようなすさまじい瘴気が噴き出した。
そんなものには構いもせず男は中に入っていく。
「弥輪！」
低く呼ばわると、祭壇の前でうずくまる影が身じろぎした。
「――――」
リキはゆっくりと近づいていった。その、影――姫巫女がゆっくり
と顔をあげ、そして

「リキ…さま…」
血の涙が彼女の顔を赤く染め、手も衣も返り血を浴びたように、真っ赤に塗れそぼっていた。
その光景に息を飲む。
祭壇の神鏡は粉々に砕け散り、壁といわず天井といわず、まるで固いものがぶつかりでもしたかのようにあちこちが破れ、裂けていた。
リキの後から入ってきた少年の息を呑む気配が伝わる。
姫巫女はか細く、震える声で呟いた。
「どうして…この世は哀しいことが多いのでしょうか…」
「――――」
「ああ…何故、裏切りばかりがあるのでしょうか…？」
そして顔を覆い、また血の涙を流した。
「――――。裏切りばかりではない。あなたが言うように確かに悲しいことは多い。しかしすべてがそうとは限らない」
リキはきっぱりと否定した。
姫巫女の顔が再び男に向けられ、凝視した。
「――――かもしれぬ。しかし、わしのように主君に裏切られ、人々に裏切られて生きてきた者は、人の心など信じはせぬ。わしのように辛酸をなめつくした者のみが、この世の無常を知ることができる」
姫巫女の口から紡がれたのは男の声だった。
憎悪をこめてリキを睨みつける。それに臆するふうも無く、リキは淡々と前と同じ質問を投げかけた。
「お前はだれだ」と――。
「くくく…」
「都を騒がせてもまだ足りぬか、方術師」
「足りぬな。――まだまだ足りぬ…！　わしの魂魄が塵と消えるまでこの世のすべてに災いをもたらしてやろう！」
泣き叫び血の涙を流す顔と、嘲笑の声。
その相反する姿にカイは眉をひそめた。
（姫巫女が泣いている…）

そうなのだろう。
しかし、違和感が伴う。
（違う…？　これは方術師の涙…？）
そもそも姫巫女ほどの霊力者がそうやすやすと憑かれたりするだろうか…？　自分もそうであったように、強い意志は厳然と影響するものだ。逃れようとする意志さえあれば、必ずほころびができる。
しかし、この姿は……
カイはますます眉をひそめ、まるで、どんなささいなことも見逃すまいとするかのように姫巫女を見つめた。
姫巫女に憑いた方術師は、拳を床に叩きつける。
何度も、何度も。
白い手はみるみる血に染まった。
「憎い…すべてが憎うてたまらぬ…！　わしの家族を奪い、友を奪い、生活を奪った奴らが憎い…！　許せぬ…許すものか…っ！」
憎いと言葉が吐き出されるたびに、姫巫女の身体から瘴気が噴出し、血の涙がほとばしった。
ふいに。
「お前、勝手だよ」
少年の声が割り込んだ。
怨念に突き動かされていた方術師でさえ、はっとするほどに少年の声には力が宿っていた。
竜王もリキも、そして憑かれた姫巫女も少年に目を向けた。
「お前、自分のことばっか言って、自分だけがつらい目にあってきて一人ぼっちみたいに言ってるけど、じゃあお前みたいな奴の言うことを信じて受け止めた姫巫女の気持ちはどうなるんだよ！　姫巫女だって、リキだって主君なんてもんはないけど、好きな人と結ばれなくて、でも、ずっとそれを我慢してて一人ぼっちだったんだ！
　お前の過去がどんなもんか俺は知らんけど、だけど、つらくて人を憎みたい気持ちは誰にだってあらあ！　お前だけじゃない。お前なんかよりずっとつらい思いしたことのある人だっているんだから

な！」
激情を押さえ込んだような声音の少年の胸には、誰が浮かんでいたのか――。リキには手にとるようにわかった。
青年の大きな手がカイの頭に置かれる。
しん、と静まり返った庵の中、姫巫女の相貌が、彼女のそれに戻りつつあった。
「カイ…」
血の涙が、透明なしずくに変わっている。
そっと手をのばす。少年は反射的にその手をとった。少年の手よりも小さな手がきゅっと握りかえしてきた。
「ありがとう、カイ。優しい子ね…いい子ね…。私はきっと誰かにそう言ってもらいたかったのね…。きっと、この方もそう…。この方は、主君に殺されそうになり、大変な思いをして倭へ渡ってこられたの。ご自分の宿業であることは、この方自身もよくご存知です。ただ、この憎しみだけはご自身にもどうすることもできなかった…。カイ、お願いがあります」
「はい」
「その剣で私を刺してください」
「――っ！？」
「私、実を申しますと、もういくばくの命もないのですわ…」
「えっ？」
瞠目する人々に淡い微笑を見せ、ふっと吐息した。
「私の家系はこのような能力があるものがよく生まれたそうです。けれど、あまりに強すぎるためか短命なのです。私の母も、その母も…今の私の歳…三十路の歳を過ぎる頃亡くなっているのです」
「な…」
「――この方と知り合えたのもなにかのご縁でしょう…。母や祖母はひっそりと息をひきとりましたが、幸い私はあなたやリキさま、海竜さまにみとられて逝けるんですもの。こんな嬉しいことはありません。一人で逝くなんて、なんて寂しいことかと思っておりまし

たけれど、私は一族の中で一番の幸せ者ですわ」
姫巫女はそう言って嬉しそうに笑った。
さっきまでの瘴気が嘘のように消え去っている。
「――――」
リキは絶句したまま、姫巫女を凝視していた。
少年はしばらく姫巫女の顔を見つめていたが、やがて頷くとすっくと立ち上がった。
「竜神」
虹色の帷子を着た麗人がゆっくりと近づく。少年は持っていた青竜刀を差し出して言った。
「竜神の手なら姫巫女は神の国へいけるだろう？」
「…坊、それは野暮と言うものじゃ」
「へ？」
きょとんとして竜王を見上げる少年の頭を手でくしゃくしゃにしながら、くすくす笑った。
「そなた、もう少し男女の機微に関して学んだほうがよいぞ」

「？」
ナンニョノキビ…？

ますますぽかんとした少年の頭をもう一度くしゃくしゃにして、
「それにな、そんな無粋なモノで女人の身体を刺すとどういうことになるか解らぬでもあるまい」
言われて、その大きな青竜刀に目を落とす。確かにこんなもので刺したりすればたいへんな惨状になるだろう。しかし、破魔の剣はこれしかない。
困ったように見上げた少年に微笑むと、竜王は姫巫女に近づき、片膝ついた。
「…手向けじゃ」
差し出されたのは細い短刀。息を飲むほどに美しい宝剣だった。瑠

璃、瑪瑙、水晶、珊瑚などが埋め込まれ、柄には竜が彫られている。
飾り房のついたそれを、姫巫女はうやうやしく奉げ持った。
「海竜さま…ありがとうございまする」
「よい旅をな」
竜王はそう言ってすいと立ち上がり、少年の腕をとって外へと促した。
「え、あ…」
腕を引かれて続こうとした少年は、戸口でくるりと振り返った。
「…さよなら、姫巫女…」
「さようなら、カイ」
それは、カイが最後に見た姫巫女の微笑だった。

しばらくして、姫巫女の庵が蒼い炎に包まれた。

※※※拾肆

それは、長く短い間の話であった。
帆船の一室で、水夫たちはリキの話に聞き入っていた。
唸るもの、考え込むもの、神妙な顔をするもの、それぞれであったが誰一人としてそれが作り話だなどと言うものはいなかった。ただし、リキは少年の素性については今までどおり黙秘していた。

「そうか、姫巫女が…」
古株の水夫が痛ましそうに呟く。それを合図に一同は姫巫女の冥福を祈った。

「竜神」
月が煌煌と輝いて、海と空を蒼く染めていた。少年は甲板に上がって呼びかけた。

燃える庵の煙を見た水夫たちが慌てて駆けつけたとき、そこにはカイとリキ、そして、少女巫女が庵に向って合掌する姿があった。
水夫が到着する前、竜王は去り際にそっと少年に耳打ちした。
「月が中天にさすころ甲板に出ていよ」と――。

やがて、漣がたち、白く輝く竜が姿を見せた。
ゆっくりと、人の形に変わった竜王は、帷子の脇から笛を取り出した。
「そなたの笛じゃ」
落としてしまった大津皇子の笛だった。
「あ！　ありがとう、竜神！」
嬉しそうに笑った少年は、大事そうに受け取るとしばらく笛をなでながら眺めた。
「坊、一曲所望してもよいか？　…死んでしまった者たちの死出の旅路の手向けにもな」
麗人の言葉に少年はこっくり頷いた。

ぴーい…ぴーひょう…
ひょうぅ…

笛の音が暗い波間に静かに響く。

高く、低く、遠く澄み渡り、溶け込み、すべての者たちを慈しむようにしみわたっていった。
竜王はしばらく耳を傾けていたが、ふいにその手が宙に差し出された。
いずこからともなく現れた軍配が竜王の手にあった。

ぴぃひょう　ひょう
ぴーひゅるる…

笛の音に引き寄せられたリキや水夫たちが見たものは、カイの笛にあわせて、白く輝く帷子をきた麗人の艶やかで鮮やかな舞であった。
その手がその足が、流れるように甲板の上で舞う。そのたびに光が散り、はじけた。

鎮魂の舞はいつまでもいつまでも続いた。

※

翌朝、安芸津は人でごったがえしていた。
伊都岐嶋の少女巫女は一旦、安芸津に帰り弥山の庵が建て直されたらまた戻るということだった。
それにしても、今日は見送りの人々が多い。
「帆をあげろ！」
「船を出すぞ！」
水夫たちの掛け合う声が空にこだまする。
ゆっくりと、船が岸から離れていく。岸辺で手を振る少女巫女に、カイは大きく手を振り返した。

「おお…神の子が旅立たれるぞ！」
老人の言葉に、見送っていた人々は”おお”と呟いて一斉に手を合わせたのである。
「な…なんだ！？」
カイはきょろきょろと見回した。海竜が現れたのかと思ったのだ。
リキは苦笑し、水夫たちはにやにや笑って言ったものだ。
「そりゃあ、なあ、カイよ。おめえ、昨晩のあの白いお人の舞を見た者はけっこういるんだぜ？」
水夫がポンと肩をたたく。
「ああ…。そうか…」
解ったような解ってないような返答をした少年に、水夫たちは声をあげて笑った。

船は新羅を目指して出発した。

※※※跋

”竜に守護された子供”の噂は、先日の方術師の騒ぎとあいまって瞬く間に都に広がった。
「白い竜に乗った美童が妖魔を追ってきたんだと」
「なんでも、大津皇子さまに瓜二つだったとか」
「赤い巨人をお供にしていたそうな…」

こんな具合に他愛も無いものばかりであったが、赤い巨人とはリキのことであろうか。
彼が聞けば憮然としたであろうが、しかし、政に関わる人々…ことにあの夜、大内裏に赴いた面々には恐怖に身を苛まれた忌むべき事柄であった。
　あの輝くような少年は、まこと、大津皇子の忘れ形見に相違ない。帝のおわす御簾に投げかけたすさまじいまでの殺気を宿した目を、人々は忘れることはないだろう。
――そう、ただ一人、別の意味であの少年を忘れないであろう人がいた。
藤原不比等である。

　文武帝とその祖母・太上天皇である鵜野讃良が受けた衝撃は計り知れないものがあった。
それはそうだろう。あの少年の父である大津皇子を謀るために不比等に指示したのは太上天皇だったのだから。
だからといって、責任逃れをするつもりはない。この政庁にあれば、自分とていつなんどき大津皇子と同じ目にあうかわからないのだ。
そんなことは重々承知している。承知してないのは、謀を企てた本人たちだ。
あの夜、そういった面々が恐怖に顔を引きつらせるのを見て内心せせら笑ったものだ。

　不比等はここしばらく、物思いに耽っていた。…にしては、怠惰な恰好で、頬杖をついてぼんやりと空など眺めている。
奥方にはまるで恋をしているようだとからかわれた。
（あの元気な坊やは今頃どうしているだろう？）
大津皇子の忘れ形見。
美しい容貌も、なによりあの瞳の輝きも、まるで皇子が現れたかのようであった。細い身体に似合わない大剣を軽々と操り、妖魔を前

にして一歩も引けを取らぬ豪胆さと精神の強靭さ。
（…あれが片腕ならこれほど頼もしいものはなかろうなあ…。逆に敵ならあれほど恐ろしい者もないだろう）
頬杖をついたままぼんやりとそんなことを考える。
政庁にいるときの敏腕な、したたかな男の顔からは想像もつかないほど、間の抜けた表情だった。
（崇りなんぞとほざくものもおるが、大津もあの子供も、こんな都のひとつやふたつに執着なぞするものか。足で蹴飛ばすぐらいのことはするだろうさ）
羨ましいような、口惜しいような…。
自分とは違う世界にいる彼らを、不比等は妬みたい気持ちだった。
――けれども。
（今はそっとしておこう）
たとえ、天武帝直系の皇子とはいえ、あの元気者がこんなところで大人しく政に励むとは思えない。それに、もしも政庁に入るようなことになれば、どこぞの阿呆どもがあの子供を利用するとも限らない…。
（父君に感謝することだ、粟津王）
不比等は立ち上がると澄み渡った空を見上げた。
彼には、粟津王がどこに匿われているか、だいたい想像がついている。だが、あの少年にはあのまま真っ直ぐに育っていってほしかった。
思う反面、ふと、少年が政庁に出仕して、”退屈退屈”と筆をふりまわすのを想像して、彼は一人楽しく、くすくす笑った。

完

AWATSU－6－（後書き）

半年ぶりに投稿させていただきました。
少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5933a/

ＡＷＡＴＳＵ

2010年10月8日23時51分発行